

に老い姑は危篤の病氣に罹つたので、りよ女は夜晝帯も解かず、身を粉に砕いて介抱した爲め、姑は危ない生命を拾つた。すると、この事が世間に知れ渡つて、終に領主本田伊勢守の耳に入り、呼び出されて領主から、褒美として白米數多賜はつた。

- 〔枝流〕……吞舟の魚は枝流に遊ばず……………(列子)
- 〔燕雀〕……燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや……………(史記)
- 〔蓋世〕……心須らく蓋世の氣あるべし……………(朱熹)
- 〔牛後〕……寧ろ鶏口となるとも牛後となる勿れ……………(戰國策)
- 〔魔力〕……思想は腕力よりも遙かに強し……………(ソフォクレス)

七〇 二八の蕾の花

正傳尼は赤穂の城主淺野侯の家臣堀部氏の妻である。正傳は一男一女を生んだが、男は故あつて僧となり、後ち蕭山和尚といふ明知識となつた。正傳は同族の金丸といふを養子に迎えて、女に娶さんとしたが、金丸はその當時既に四十二の年を重ねて居るのに、女は二八の蕾の花、心に染まぬ風情を見て、正傳は柳眉を逆立て

「金丸殿は智あり勇あり、堀部の家名を嗣がすに足りまする、それに何ぞや年齒が違ふといふだけで首を振るとは、何事でござりますぞ。この堀部の家には、さういふものは一日でも置くことはなりませぬ」

と、娘は返す言葉もなく、終に母の心に従つてその間に一人の娘を設けたが、産後間もなく無情の風に誘はれて散り失せた。正傳はその赤兒を順と名づけ、自から厚く撫育したが、この娘こそは赤穂の義士四十七人の中にも、特に忠

義の志厚かりし堀部安兵衛武庸の妻となつたものである。かゝる女丈夫の資あるものから、主君淺野長久侯の世子長矩の乳母に抱へられたが、正傳は一生懸命、毎朝世子に讀書を勧め、未だ曾て一刻もその側を離れない。少しでも憎けられる容子があると、涙と共に諫めて止まず、世子は少しく性急にして怒り易き癖があつたが、憤怒の炎胸を焼く折りにも、正傳の影が見えろと、忽ち黙然として顔色を和らげられた。正傳は年七十を過ぎ、老體のために御前を辭したが、後日長矩が短氣の爲めに殿中の騒ぎ、これは正傳の諫言を忘れた結果である、人々は皆な遺憾の齒を喰ひしばつたのである。

〔時間〕……大智者は時間の損失を悲むこと切なり……………(ダ　ン　テ)
 〔節時〕……時を選ぶは時を節するなり……………(ベ　ー　コ　ン)
 〔世界〕……汝の位置を決定し、而して世界を動せ……………(キ　ヨ　ー　テ)

〔玩物〕……物を玩べば志を喪ふ……………(書　經)
 〔本源〕……自ら勞して自ら食ふは、獨立自尊　本源……………(福　澤　諭　吉)

七一 産婦の氣轉

北國大名の家中に濱田といふものがあつた。江戸在番の留守に妻は出産したまだ七夜もたゝないので、産床にあつた時、或る日血相かへ、血刀を引提げて駈け込んだ大の男があつた。平伏したまゝ、

『某は聊か志願ある身、惜からぬ命を全ういたしたくて、これまで無禮をも願みず、參上致した次第。御構ひ下さらば生前の御恩』
 と述べた。善悪は扱て措き、はや生命は咫尺に差し迫つた人、一期の願ひと頼まれて見れば、懐中の烏、殺すは卑怯と妻は引き受け、枕の後ろへ入れ夜着を

被せ、初めのやうに倚りかゝつて居ると、案に違はず、ドヤ／＼と四五人の侍

「たしかに逃げ込んだ曲者、隠さずに御出し下され」

とわめき立てるを、妻は静かに眼を開き

「各々方は何人様か、當家は小身の家、一人の下女より外に誰れも居りませ
ず。妾は産後の惱みに枕も擧らず、なんで人が隠されませう。裏にも出口が
あれば、通り抜けたかも知れませぬ。殊に案内もなく邸に踏み込み、而かも
女の寢所へ押し込めらるゝとは御無禮千萬。いづれの御家中か御名を承りま
せう。病みたりとて武士の妻、耻辱を受けましては夫への手前、このまゝに
はなりませぬ」

と、後ろ鉢巻に褌からげ、り／＼しく薙刀の鞘を拂つて立ち上つた。追手の者ど
もは烟に巻かれて、唯だひた誤まりに詫び入つたが、妻は

「この期に及んでお詫びとは卑怯千萬。武士には武士の禮儀のあるもの、禮
儀を知らぬは武士でない。さては各々方は女ばかりと見かけて押し込んだ盗
人でござりまするか。その悪名に御腹が立たなら、いざ尋常に勝負なされ」
と詰め寄せた、いよく一同は氣を吞まれて、頭かくかく逃げ出した。妻は夜
も早や静まつてから、先きの男を出し

「今宵は御宿致したけれど、御覽の通りの女ばかり、夫への義理・世間への
手前、おとめ致すはお互の不利。裏門からいづれへなりと御落ちあるやう」
と湯飯を與へて、事の次第、相手の名、その當人の姓名を聞きながら、道の案
内を教へ、下女にあたりの容子を窺はせて落してやつた。そして妻は下女へ口
留めして、昨日の通り暮らしたといふ。

〔新見〕……須く舊見を洗ひて、新見を立つべし……………(張 横 渠)
 〔愚人〕……玉磨かざれば光なし、人學ばざれば愚人なり……………(實 話 教)
 〔食物〕……知識、心の食物なり……………(ボブ キンス)
 〔朝起〕……朝起は三文の徳なり……………(通 俗 篇)
 〔二口〕……一日作さざれば一日食はず……………(通 俗 篇)

七二 丹精の白木綿

天明二年美濃の國は大洪水で、田畑は残らず水に浸り、殊に海西郡の村々は
 非常な難澁をした。中にも大和田村の百姓どもは、救済の義をその筋へ歎願に
 及ぶと、領主から巡檢の役人がやつて來た。庄屋のいふには、百姓共の中に一
 軒奇特なものがある。それは小八といふもの、未亡人さよと、その娘のさくで
 ある。さよは老體、さくは中瘋なので、田畑の働きが出来ないから、木綿を織

つて細き煙を立て、居り、人から先きに救助を願ひ出づべき筈であるのに、そ
 の容子が無いから、これを勧めて見たのに、強ひて辭退した。役人は不思議の
 ことである、庄屋の案内にその家を尋ねて見ると、如何にも憐れな檐下の住
 居、勝手道具さへ碌々なく、二人がせつせと木綿を織るさまは、實に涙の溢れ
 る惨めさである。一村が擧つて救助を請ふたのに、何故に救ひを願ひ出でぬか
 と尋ねると

「今年は御上への御年貢も少ないやうに承はりまして、畏れ多いことに存じ
 ます。私共が手業も、綿の値段がお高くて、儲けも少なうござりますれど、
 生命だけは繋いで居りますれば、別に御無理は申しあげませぬ」

との答。賤しい女の身に不似合な神妙の次第と、その翌年の春領主松平攝津
 守から褒美として金錢を賜つた。母子は夢かとはかり打ち喜び、二人の丹精で

清く織り立てた一反の白木綿を、お雑巾の料にもと、領主へ献上に及ぶと、領主も深くその志を愛で、永くこれを残して置かれたといふ。

- 〔仕事〕……仕事を追うて仕事に追はるゝな……………(俚)
- 〔十度〕……人一度すれば、己れ之を十度す……………(中)
- 〔遠征〕……知識なき熱心は、暗中に遠征するが如し……………(ニュート)
- 〔休息〕……労作なくんば安樂もなく、休息もなし……………(カライル)
- 〔努力〕……努力は地と廣さを均くし、天と高さを均くす……………(カライル)

七三 寡婦の孝養

岡志奈子は二十二歳の時、濱田侯の儒臣岡章平の子息行に嫁して、播州の三木に住つた。志奈子は夫に對して温順、舅姑に對して敬愛、その界限切つての

譽めものであつたが、殊に心臓の痼疾に悩める義妹由布に對する懇切な態度には、人みな感激せぬはなかつた。間もなく夫は胃を患つたので、志奈は夜も帯を解かず、身を粉に碎いた心盡しの、手厚い看護りもその効なく、憐れ歸らぬ旅路に立つた。志奈子は尙ほ年は若く、子は無いから、人々が再婚を勧めたけれど、

「御母様も御年齢をめし、由布さんも御病氣が宜しくない。それを妾がどうして外に參られませうぞ」

といつかな聽き入れない。後ち舅の章平はふとしたことで、藩主の勘氣に觸れて、禁錮の身となると、活計は忽ち左前になつた。志奈子は辛ひ思ひは噫氣にも出さず、ます／＼舅姑には孝養を盡くし、病める義妹には慰安を與へ、洗濯裁縫何から何まで人手を借らず、眞夜中でも小暗い燈火の下に、忙がしく針を

運ぶを見て、感嘆せぬものはなく、いつしかこの事が藩主の耳に入り、その婦徳を賞めて、終身一人扶持を賜つた。舅の章平はこれを聞いて大に喜び

「罪人の家族が賞與を受くるとは、未曾有のこと、殊に子婦のやうに、その賞詞の懇篤なのは稀れである」

と、里方の横河安定の許にも報らせて、みな喜びの涙に咽んだのであつた。

- 〔勞心〕……君子は心を勞し、小人は力を勞す……………(經 典)
- 〔渴祿〕……古の學者は道に渴し、今の學者は祿に渴す……………(沈 瀝 子)
- 〔先思〕……先づ思つて後行へば則ち過鮮し……………(慎 思 錄)
- 〔神人〕……最も善き勞働組合は、神人の合同なり……………(西 誌)
- 〔十分〕……九分足らず、十分は溢ると知るべし……………(光 陰)

七四 百姓の老婆

砲烟暗く彈雨繁き獨立戦争の七ヶ年間、捷報敗報交もく聞えて、人々は皆な安き思ひもなかつたのに、ワシントンの母メーリーは、全く運を天に任せて泰然自若として騒がず、

「愛する子供を戦地に送つて居ましては、心配なのは人情の常ではございませぬが、これ皆な人間の権利の爲め、世界の自由の爲め、名譽の戦ひを、戦かつて居るのではありませんか、それにその母たるものが徒らに泣いたり、塞いだりしては濟ませうぞ」

と、常に心の弱い母を慰めて居つた。戦争の中はいふに及ばず、八十の高齡を重ねた後でも、メーリーは日夜烈しく働いて、子息が世に時めいたときでも、フレデリックバルグの怪しげな茅屋の内に、昔風の古びた椅子に凭りかゝり、粗服を身につけて田畑に出かけ、作男の働き振りを監督する態度は、誰れが目

にも水呑百姓の老婆としか見えなかつた。又たワシントンの脇股となつて、獨立戦争を助けた佛のラファエツト將軍が、歸國の告別のためにメーリーを尋ねると、例の手織の粗服を身に着け、麥藁帽子を戴いて畑の真中で忙がしく働いて居つたが、將軍を見ていとも叮嚀に挨拶し

『侯爵閣下先づ敗屋へ入らせ給へよ。着物を着かへるやうな改まつたことは致しませずに、歓迎致しませうよ』

と。やがて將軍は種々の挨拶を述べ、終りにワシントンのことを物語つて、頻りにこれを賞め稱へると、メーリーは徐ろに口を開き

『私はジョージの致しましたことは一向驚きませんの、あれはいつも極く温良な子供でしたから』

との答へ「この温良な子供」とは母メーリーが、晩年に屢ば口にしたところの語

である。かくて十九世紀の年光將さに盡さんとせし時、ワシントンはこの世を去つたが、まだ一年たぬに、メーリーも八十七歳で、フレデリックスバルグの士となつた。

- 〔諫子〕……家に諫すあれば、其家必ず直し……………(盛 衰 記)
- 〔殺汝〕……依頼心は汝を殺すの劍に同じ……………(西 諺)
- 〔朋友〕……吾れは吾が依頼すべき唯一の朋友なり……………(テ レ ン ス)
- 〔氣帥〕……志に氣の帥なり、氣は體の充つるなり……………(孟 子)
- 〔桑弓〕……何んその 岩をも徹す桑の弓……………(源 吾)

七五 最後の忠諫

金の獨吉は撤台輦の妻である。合輦が中京の守備に任ぜられた時、敵兵に十

重二十重に圍まれながら、癪が脊中に出て、残念にも出陣することが出来ない。獨吉は心の底に落城を期して、夫に向ひ

「あなた様は別にこれと申す御功勳もありませんのに、御宗室といふので、いつも重要な職を御勤遊ばし、國恩を受けらるゝことが最も深うござりまする。唯今敵の大兵が城を圍んで居りまするに、御病氣のために御出陣が出来ません。たとひ落城に及びまするとも、精銳の兵を御引率なされて、包圍を破つて御出遊ばせ。そして出来ませすれば、長男を伴れて京まで御逃げ遊ばせそれが出来なければ、お獨りで御上京。又たそれも出来なければ、名譽の戦死を御遂げ下さい。これが通れ御報國の健げな舉動かと存じまする」と。これを聞いて合輦も大に勵まされ、病を推して城の巡視に出かけると、獨吉は一切の衣服調度を纏めて臥榻の側に積み、艶粧盛服して侍女に向ひ

「私が死んだらこの臥榻の上に置き、火をかけて焚いて下さいよ」といひ、戸を閉ぢて縊れて死んだ。侍女は遺言通り屍を臥榻の上に載せ、衾をかけて被ひ置くと、やがて合輦は歸つて來た。獨吉が勇ましい最期を見て「あゝ妻は我が名を汚がさなかつた。我れもどうして朝廷の名を汚がさうや」と、先づ亡妻の屍に火をかけ、覺悟を決めて待つて居ると、間もなく城は陥つた。合輦はこゝぞと、決死の士を率ゐ、圍みを衝いて突貫したが、多勢に無勢の悲さ、もうこれまでと濠に身を投げて歿した。

- 〔小枝〕……小枝と雖も、亦た忍耐と工夫とを要す……………(スマイルス)
- 〔安心〕……安心は萬物に必要である……………(漱)
- 〔困苦〕……凡ての安樂は、困苦を通過せざるべからず……………(漱)
- 〔正義〕……正義の爲めに斃るゝは、正義と共に生くるなり……………(牛)

〔正直〕……正直なるものほど、人に遣はれやすい………(漱石)

七六 從 順 の 力

羅馬帝王の中で、第一の暴君といはるゝニロー帝の皇后リヅイヤは、帝の崩御後に、又たアウガス帝の寵妃となつたが、或る時の貴婦人の會合に、リヅイヤを圍んで人々が

「あなた様、どうしてあんなに、皇帝様を自由自在に遊ばすことが出来ますの、秘訣もあらばお教へ下さるまいか」

と質問があつた。するとリヅイヤは

「唯だくこちらから從順に仕向けするだけのことですよ」

と、いともしとやかに答へた。

- 〔國寶〕……信は國の寶なり、民の庇ふ所なり………(左傳)
- 〔顯外〕……内に誠實なれば、行ひ外に顯る………(スターン)
- 〔誠意〕……其の意を誠にするとは、自ら欺くことなきなり………(大學)
- 〔言信〕……言必ず信あらざれば、行ひ必ず果たさず………(孟子)
- 〔感至〕……人を感じしむる能はざるは、誠の至らざるなり………(從政名言)

七七 天 下 の 歌 人

下田歌子女史は濃州岩村藩士平尾揉藏の長女で、安政三年八月に生れ、初めの名は佑子といふて、有名な儒者東條琴臺は、その祖父に當つて居る。この子の祖父の琴臺は、誰れも知つて居る通り、熱心な開口論者であつたが、父の

採藏はこれに反して激烈な攘夷論者であつた。そこで採藏は徳川幕府の忌諱に觸れ、女史が四歳の時に塾居となり、十一歳になるまで許されなかつた。鉦子は父の傍に居て、幼少から絶えず、我が國體の尊いことを説き聞かされたのであつた。そうして四五歳の時すでに父が門人に授けて居る、四書の素讀を聞き覚えて、弟子が讀み詰つて居ると、側から教へて遣るほどで、和歌は六七歳から、漢詩も七八歳から作り初めたさうである。父は和歌の天才だけは發揮させたいと思ひ、京都の歌人八田知紀翁に頼み、書信に托して添削を受けさせて居た。王政復古、明治の御代となつて、鉦子は父母に伴られて東京に出た。それで翁は鉦子の來京を喜び、その後は殊更熱心に道を教へ、叮嚀に朱を加へて遣るのであつた。その當時翁は宮内省に出仕して、皇后陛下の御歌を拜見して居つたので、或る日陛下の御前に伺候し、圖らずこの鉦子の歌才を言上した。す

ると陛下はかねてこの道に御熱心に渡らせられるので、「是非一度伴れて參れ」との御説が下つた。そこで鉦子は明治五年十七歳の時、恩師知紀翁に伴られ、始めて陛下の御前に伺候した。やがて陛下から、

「可愛い娘よ」

との御言葉が掛り、又た

「何か目前の物を題にして歌を詠んで見よ」

との御言があつた。鉦子は暫く考へた上で、

敷島の道をそれともわかぬ身に

あやふくわたる雲のかけはし

と認めて差上げた。この他にも、御題を賜つて數首の即吟を詠進したが、いづれも斯道の天才が閃いて居るので、陛下の御感斜ならず、辱くも「歌子」と

いふ名をさへ賜つたのである。その後ち間もなく、知紀翁の高足である、故御歌所長高崎正風男の推舉で、宮内省出仕を仰せ付けられ、陛下の御勉強の御相手を申上げることになつた。その頃陛下も殊に學問に御熱心で、毎日侍講を召され、國史漢籍や洋書などをそれ／＼進講せしめられた。歌子はこれを傍聴して勉強するの光榮を得たのであつたが、大病に罹つたので官を辭した。病が癒つてから豫ての許嫁の、民谷流の劍道の達人下田猛男と結婚した。然るに夫猛男は結婚間もなく病歿した。女史は再び元の獨身となつたが、伊藤博文公にその才學を認められて、再び雲上の女官となつたのであるが、數年の後ち仔細あつて、雲井を去つたのである。

〔方便〕……誠實は最良の方便……………(ワシントン)

〔神聖〕……誠實と眞實とは、人心に屬する最も神聖なるもの……………(シ
 〔孝衰〕……禍は懈惰に生じ、孝は妻子に衰ふ……………(説
 〔不諂〕……孝子は其親に諂はず、忠臣は其君に諂はず……………(莊
 〔百行〕……孝は百行の基なり……………(管
 子) 子) 子)

七八 涙の訓戒

西暦一八〇七年ナポレオンの鋭い鋒先に逐ひまくられて、連戦連敗の眞最中普魯西王ウキルヘルムの後ルイゼは、オーデル河畔のシウツトに通じたが、十一歳のフレデリヒ、九歳のウキルヘルムの二皇子の手を執り、兩眼に涙を浮べ、言葉に満身の力を籠めて、懇々と訓戒を加へていふには、

「味方の敗北は眞に悔しいです。この涙も全くこれがためです。噫々、今は普魯西國もなく、普魯西軍もなく、國民の榮譽もなく、皆なオールスタート

とエーナの戦場を蔽ふて居た霧のやうに消えて了つたのですよしお母さんが亡くなつた後でも、決して今日の不幸な態を忘れてはなりませんよ。今お母さんが祖國の敗滅を見て悲しむやうに、お前達もお母さんを想ひ出して涙を流して下さい、否えく涙だけで満足しては駄目です。活動せねばなりませんよ、お前達の力を發展させねばなりませんよ、多分御國の保護の神は、お前達を棄てられまいから、その時こそはお前の國民を不面目と誹謗と國辱の中から救ひ出さねばなりません。噫、これどうぞお前達は當時の惡風に感染しないで呉れよ。偉い人物となつて、大英雄大豪傑の光榮を身にたまめねばなりませんよ。お前達が遠大な望を抱かなければ、フレデリヒ大王の子孫ではない、血統ではない。萬が一身を粉に砕いても、この屈辱を脱することが出来ないなら、寧ろ死ぬるがよいです、ルイ・フェルチナンドのやうに打ち

死して下さる。」

と。ルイ・フェルチナンドとは、大王の甥で、少し前に勇ましい戦死を遂げた剛のものである。この九歳のウキルヘルムこそは、後ちに鬼將軍モルトケと鐵血宰相ビスマークを左右に隨へ、ルイ・ゼが多年熱望した獨逸聯邦統一の一大事業を成就したところのウキルヘルム第一世である。ナポレオンは女王を評して、

「普國の女王は慥かに天稟の才女であつた。學識もなか／＼才能もなか／＼豊かに、十五年以上の間、普國實際の國王であつた。余と會見の際にも、余は敏捷に談しかけたが、彼女は常に先を越して、少しもひけを取らなかつた。彼女はその云ひたいことの方に數々話頭を向けたが、而かもその遣り方が巧妙なので、少しも人に不快の感を與へなかつた。」

といつた。

- 〔殺人〕……不潔の空氣は、人を殺すこと刀劍の如し……………(アンガスミス)
- 〔保健〕……健康を保つは、一つの義務なり……………(スベンサー)
- 〔發狂〕……酩酊は、一時の發狂なり……………(ピタゴラス)
- 〔少癒〕……病は少しく癒ゆるに加はる……………(素言)
- 〔快樂〕……健康は快樂を生じ、快樂は健康を生ず……………(スベグテーター)

七九 滿載の寶石

ナポレオンの妹マリー・ポーリンは、夙に美人の譽れが高くあつて、ボルゲ
 セー公爵に嫁したが、兄のナポレオンは運命が傾いて、エルバに流竄の身と
 になると、波路遙かに孤島に渡つてこれを慰め、他の家族の間に立ちて、通信を

の他何にくれとなく斡旋した。やがてナポレオンはエルバを逃れ歸つて再舉を
 圖り、オートルルーの一戦に、一生の運命を賭とすることゝなると、兄想ひの
 ポーランは心も心ならず、我が身若し男ならば兄の旗影に立んものと、詮な
 き愚痴を溢すも憐れ、千思萬考の末終に何事か心に決しけん、衣裳箆筒から數
 多の衣服を取り出し、色に色添ふ萌黄琥珀に、金絲銀絲で樂器を織出した上衣
 から取り放す金剛石、紅碧玉、光輝燦爛たる髪飾、四邊映ゆき玉の指輪、そ
 れを一つの函に納めて兄の許に送つたのは、軍用金の一部に充てんとこの優しい
 志であつた。かくてオートルルーの夕に將星墜ちて、ナポレオンの御した車
 は分捕られ、倫敦で公衆の觀覽に供せられたが、車中に滿載の寶玉は目も眩む
 ばかり、これは何事ぞと大に人目を引いた。これは兄ナポレオンが妹の好意に感
 涙を灑きながら、これを送り返へさんと計つたのであつた。若し文豪ユーゴー

夫婦は同體

二〇八

のいふ通り、千八百十五年六月十五日の夜に雨が降らずに、オートルルーが佛軍の勝となつたなら、この寶玉は再び舊主の手に歸つて、佳人の頭を飾り、手を飾り、歐洲の交際場裡に花と咲き月と輝かさんものを、さりととは殘酷な運命の神よ、無情なる雨の嵐よ。

〔長所〕……缺點は常に裏から見た長所である……………(蘆) 花)

〔事實〕……智者は凡ての者を透かして事實を見る……………(獨) 步)

〔餘裕〕……放心と無邪氣とは餘裕を示す……………(湫) 石)

〔怠惰〕……生學問はさすものでない、怠惰の原だ……………(蘆) 花)

〔明日〕……人に明日を卜するの明なし……………(蘆) 花)

八〇 夫婦は同體

佛國革命の頃、コージャル・ダ・マウチーは捕はれて、ルキセムバルクの獄に送られると、その夫人も伴いて来る。獄吏から入獄通知書には、夫人のことが見えないと注意されても、夫人は顔を横に振り

「イエ夫が、入獄しますのに、妻が入獄致さない筈はありません。」

といふて、いつかな聴かない。やがて裁判所へ呼び出されると、夫人も亦た伴いて出頭する。検事は夫人に向ひ起訴せないと通告しても、夫人は

「イエ夫が訴へられますのに、妻が訴へられない筈はありません。」

といふて動かない。やがて死刑の宣告があつて檻車に載せられ、刑場に送られる時も、夫人は矢張り同乗する。刑事の役人は、宣告に洩れることを夫人に告げても、

「イエ夫が宣告を受けまするのに、妻が宣告を受けない筈はありません。」

夫婦は同體

二〇九

と、終に同じ刑場の露と消えたのであつた。

- 〔精神〕……人間は精神が肝腎、精神の腐つた人間は駄目……………(蘆 花)
- 〔弱點〕……己れが造つた型に囚はれ易いのが人の弱點である……………(蘆 花)
- 〔疑問〕……疑問の前には人眞目となる……………(獨 歩)
- 〔活動〕……沈思冥想は靈の活動なり……………(獨 歩)
- 〔人格〕……事業は往々一時なり、人格は毎に千載不磨なり……………(蘆 花)

八一 少女の奮闘

佛國の一少女ジャン・ダークは、西曆千四百十二年佛國の北方トムレミーといふ寒村に生れ、田舎の少女としては割合に行届いた教育を受けた。この寒村は風俗が極めて敦厚な方で、國君に對するの志も亦た一段と深い方であつた。ジ

ジャンはこの清い空氣の中に生ひたつたので、その氣象も亦た素直な方で、塵に染まぬ蓮の花のやうな心を持つて居た。その頃國王チャールス六世が崩御後、王位に座し給ふべき嗣子が無つた、かねて佛國に垂涎して居た英王エトワート三世は、その母が佛王の妹であるといふ理由で、王位相續の權利を主張し、到頭海を越えて佛國に攻め入つた。そこで有名な百年の役の端緒が開かれ、佛國民は六十年の間塗炭の苦みを嘗めさせられた。戦ひはいつも佛軍に利なく、英軍は着々として勝をしめ、佛王チャールス七世は、四面楚歌の中に包圍されたこの儘行けばいよいよ滅亡の不幸を見るかも知れんと、白百合のやうに可憐なジャンは、

「嗚呼いとしいのは王様である。」

とシミ／＼と、國君の爲めに、

「幸福になりつき給へ。」

と、神に祈ることを忘れなかつた。折柄兵火の恐怖は、やがてトムレミーの寒村をも襲ふて、その平和を破りかけた。ジャンの父は一家族を挈げて難を避けた。千四百二十三年の夏、風涼しく青葉を立つる気色も見えぬ眞晝頃、ジャンは何心なく後庭に出て、不圖雲の峯蟠かまる大空を仰ぐと、俄かに一道の光明サツと眼を射たやうに思つた。すると何者とも知らず、

「ジャンよ、おん身は溫柔しい少女だね、信仰深いのは感心じや、今後一層信仰を厚うするがよい。」

と耳邊に呟く聲がする。彼女は不思議に思つたが、何者であるか判らない。すると又た間もなく數日の後、例の光明に接し、その中に白い翼のある天女が聲涼しく、

「ジャンよ、彼の可憐な國君を不幸中から救つてあげたい。」と告げた。ジャンは打ち驚きて地上に跪き

「神様！ 妾のやうな纖弱い貧家の小娘の身で、どうして左様なことが出来ませう。」

と申すと、天女は微笑んで、

「否、心配しなくとも、大丈夫だから安心なさい。聖カザリンと聖マーガレットは、御身に力を添へられるであらう。」

と云ひも終らぬにその姿は消えて了つた。ジャンはいよく不思議に堪えず、この事ばかりを思ひつゞけて居ると、終に聖カザリンや聖マーガレットの姿が、眼前にチラ附くやうになつた。斯る間に佛國の危機は、刻一刻と迫つた。この有様を耳にしたジャンは、神の御告げを想ひ起し、いよく國難に殉じて

國君を救ひ參らすべき時が來たと、先づ神の告げのことを父母に話して、決心を打ち明かすと、何だか嘘のやうに解して相手にならぬ。次ぎに叔父に話すると、賛成してウハーコーリーの知事に話してくれたが、知事は常識の上から判断して、

「纖弱い少女の身で、從軍するなんぞといふのは、狂氣の沙汰じや。」

とて拒んだ、所が何時か一般の人々の耳に入り、ジャンの見た奇蹟に心を動かして、ジャンの志しを無にせまいといふものが多く、流石知事もこれを拒む譯にゆかなかつた。府民は熱心に奔走して、ジャンのために一頭の駿馬、一領の堅甲、一口の帶劍を用意した上、六人の衛兵をつけて、オルレアン城へ向はせた。ジャンが到着した時は、最早や敵に抗する力も失せて、運を天に任かすの他はなかつた。チャールス七世の心は恐怖に襲はれながら、或る侍臣の勧めに

從ひ ドーフヒン山中に逃れやうか、或は將師の言葉を容れて、城に立て籠らうかと思案最中である、其處へ不思議の少女が謁見を求めたので、兎に角夜に入つて引見されたが、王は他の將校貴族などに混つて、ソツとジャンの容子を見られた、敏慧いジャンの眼は直ぐ王の姿を認め、

「王様、神は王様を御守りになつて居ります。」

と申上げると、王は尙ほ素知らぬ風で、

「朕は王様ぢやない。」

と云はれたが、ジャンは固く信じて動せず、

「いや、慥かに王様に違ひありません、王様よ、妾はこの國を救ふため遣はされた神の御使でござります、何卒妾を信用して下さいませ、陛下若し妾に一隊の兵士を御授け下さいますなら、妾は屹度オルレアンの圍みを打ち破

つて、この國を安全にいたします。」

と云つた態度に、彼女を輕侮した將校貴族等は少しく意外に思つた。王も亦た多少信を以てこの少女に對せらるゝやうになつた。これを聞き傳へたオルレアンの府民は、頻りとジャンの噂して、

「早くこの包圍から脱けたい。」

と熱望せぬものはなかつたが、王を初め臣僚はまだ充分ジャンの性質を解せぬため、唯だ不得要領に留め置くに過ぎなかつたのである。

〔專一〕……個人の義務は相手に愉快を與ふるが專一と思ふ……………(漱)

〔馬鹿〕……慰められる人は馬鹿にされる人である……………(漱)

〔煩惱〕……天地に遺なくんば、煩惱の鬼たるに過ぎず……………(獨)

〔野心〕……野心は人心を壓迫して窮屈なる世界に入らしむ……………(獨)

石)

石)

歩)

歩)

〔自由〕……夢ほど世は自由ならず……………

(蘆)

花)

八二 無名の救世主

ジャンダークーは、身に勳爵士の甲冑を着け、五個の十字架を帯びし劍を佩き、豪勇無双の名ある英傑チャールス・アルテルの残した武器を手にして、救世主の肖像に「ゼーサス・マリヤ」と記した白旗を翻へし、サードオーロンといふ勇武の勳爵士、フツザー・バスクエレルといふ氣高い老僧が附き添ひ、他に二人の傳命使と二人の從者を従へて、殺風景な將卒の間に現はれた、この體を見て疲勞した兵士は全く元氣を回復し、四散したものも急に集つて、六千人ばかりの軍隊を組織することが出來た。すると、チャールス七世も俄かに蘇へり、貴族將校等も戰意を起すやうになつた。そして全軍を指揮する權力は、ジ

ヤンに與へられた。かくてジャンは、第一に軍隊から不徳の分子を除くことに努め、

「戦ふ前に、心の底から自分の罪を懺悔せよ。」

と命じた。又た英軍に對して、

「疾く不正の軍を撤回して、國境の外に退かれない。」

と申送つたが、英軍は

「アン生意氣千萬な」

と鼻であしらつたのである。ジャンは更らに味方を飢餓の中から救ひ出さうと思ひ、此方へ盡力したが、部下の將校等は、一少女の命に従ふことを好まず、屢ば命令に背いたが、ジャンは屈せず、到頭ローア河から二艘の運送船で、府内へ糧食を搬び入れ、空腹に悩む老若男女を救つたから、いづれも「天使の

再来」として敬愛の情を表するやうになつた。今度は英軍の中へ突進するのであるが、

「平穩な終局を以て血を流したくない。」

と考へ、寄手に矢文を送つて事なく退軍されたいと要求したが、聞き入れない。そこで最後の手段として、自から馬を城濠の橋の邊まで進め、清らかな聲を張りあげて、退軍を請ふたが、矢張りこれに應じない。この上は兵刃に訴へるの他に術がないと、急に全軍に命を傳へ、自分は真先に駆け出し、疾風のやうに敵の包圍中へ突進した。この不意討には英軍も狼狽して陣形を壊し、漸次退却して、オーガスタンやトールネルの兩堡砦に若干兵を残し、全軍はローア河の南方に退却した。ジャンはこの機を逸せず、ローア河を渡つて、オーカスタンの堡砦を襲ふと、敵も亦た全力を舉げて抵抗したが、ジャンは更に勇を

振ひ、百合の花の印ある軍旗を濠端に樹立て、味方の軍勢を磨いて突進し、敵の堡砦を陥れた。その翌日トールネルの堡砦を襲つたが、敵は悉く城濠の橋を撤して、濠のない方面へ新しい池を穿ち、ローア河から水を引いて、佛軍の近かれぬやうに準備し、武勇の名高いグラツデル將軍が、精銳の兵士を従へて堅く守つて居る、ジャンは一向に怯まず、極く少數の軍勢を率ゐて攻め落さうと、朝の十時から手強く攻め立てたが、一向ビクともしないから、ジャンは決死の覺悟で、梯子を城壁に懸けさせ、敵の城中に入らうとしたが、忽ち敵から放つ矢に頭部を射られて濠の中へ陥り、將さに生捕にされやうとする所を、味方の衛兵に救はれた。ジャンは尙ほ勇を鼓して、

「神の援助は必ず佛軍の上にある。」

と信じ、手づからその矢を引き抜き、布片もて傷を包ませ、再び戦場に姿を見

せた時は、佛國の將士いづれも元氣を盛りかへして争ひ進み、敵は又た起つてとが出来なからうと思つた、ジャンが何處からともなく現はれたので、不思議の感に打たれ、少しく色めき渡る虚隙に乗じて、佛軍が一齊に突進し、遂にトールネル城を占領したが、ジャンはその功に誇らず、又た華やかな宮殿の中の生活をも好まず、素朴な故郷の空氣を慕つて止まなかつた。その後尙ほ佛國のため能く戦ひ、最後に英人の手に捕はれて、悲壯な最後を遂げた、國主は實にジャンのために平和を得られ、又た立派な即位式を擧げられたのである。

【浮沈】……人は時の海に浮沈す、此海や底もなく際涯もなし……(獨)

歩)

【經驗】……大なる經驗は大なる品性と大なる信仰を養ふ……(獨)

歩)

【根氣】……世の中は根氣くらべてある……(蘆)

花)

【立場】……人が自己の立場を知らぬ程憐れむべき事はあるまい……(蘆)

花)

〔桀紂〕……馬鹿に金を持たせると、大概桀紂になりたがる………(漱)

石)

八三 三人の姉妹

支那の漢の時代に、蜀郡の太守王子雅といふ人は、最愛の三女を残して歸らぬ旅、三人の姉妹は亡き父の志しを繼いで家を興し、孝行の道を全うしたいと思つたが、男兒でない悲しさには力及ばぬので、日夜苦悶して心が落つかぬ様子であつた。或る日三人の姉妹が膝をつき合はせた折、第一の姉は先づ自分の思ひついたところを述べやう。

「女ほど腑甲斐のないものはありません。父が亡くなられた後は、立身出世を計つて名を揚げ、家を興すのが第一の孝行ですけれど、女の身の悲しさ、どうすることも出来ません、ですから父の遺産の幾分を割いて、立派な石碑

を建て、其處に父の傳記を彫りつけたらどうでせう。」と相談に及んだ。二人の姉妹も

「それはよい思ひつきです。」

と直ぐ賛成するので、姉は自分の受取つた分配金の中で、立派な墓を建て、後の二人の妹は石塔を建て、父の傳記を彫りつけたのである。

- 〔同情〕……同情は我れの敵である………(漱)
- 〔超越〕……吾人は須らく現代を超越せざるべからず………(樽)
- 〔半開〕……花は半開、興は八分、あまりに狂へば過ちに終る………(蘆)
- 〔人師〕……人の患ひは、好んで人の師になるにあり………(蘆)
- 〔艱苦〕……艱苦は人をして一段の進歩あらしむる推進器なり………(獨)

石) 牛) 花) 花) 歩)

八四 薔薇の花

精 神 修 養

獨逸の少女ベチーアムボスは、チエークスボンドと呼ぶ土地の富める酒屋の愛娘である。同胞四人の中で、長兄は彼女と最も仲むつまじい方であつた。この長兄は幼少から才學をもて優り、熱心に學問に凝つて、二十八歳の時、カーフンド大學を卒へて神學士の稱號を受けた。所がまだ大學にある頃から、猶太宗の富豪家の娘と堅く夫婦約束をして、

「卒業したら新家庭に御身を迎へませう。」

といひ、それには、猶太宗だけは止めて、基督教に改宗していたぐさといふ條件を付け加へた。これには女の方でも異存がなかつた。斯くて彼女は、ヘンリーの言葉に従つて、内々改宗の手續をしやうとするので、何時しか親戚の

耳に入り、

「それは甚だ心得違ひである。」

と、俄かに一室の中に禁錮された、かく壓迫を受けなければ受けるほど、ヘンリーが戀ひしくなり、ヘンリーも亦た二世かけて約束した、娘のことを思つて煩悶した。その結果

「何處か自由の境地へ行きませう。」

と、窃かに牒し合せて國を遁れ出て、シレンシアといふ處へ來て、基督教の洗禮を受け、いよく夫婦になることを誓つたが、かくと知つた娘の親戚は、非常に打ち驚き、早速娘の搜索を警察へ訴へ、種々手を盡くして在處をつきとめて取押へた。そしてヘンリーに對して一種の惡感を抱き、

「彼の男は娘を欺して拐帶した不埒な奴でございます。」

美 女 し き ど ゝ ろ

と訴へた。裁判官は、ヘンリーに前後の事情を詰問すると、少しも隠さず、一切の顛末を述べた。今度は彼の娘に尋問すると、少しく気が逆上せたと見えて、ヘンリーの陳述と大分に違つたことをいふので、

「ヘンリーは、偽りの事實を申立てたのである。」

と、早速獄裏の人とされた。これを聞き知つた妹のベチーアムボスは、深く長兄に同感を寄せ、

「どうかして救ひ出してあげたい。」

と心を悩ます間に、力と頼む父は病死し、後に残つた母は長兄のことばかり思ひわづらいて沈鬱な気分になり、ぐづぐづして居るうちに六年の月日を過した。或る旅商人の話によると、

「長兄は西伯利亞のパリンスカーと呼ぶ處で苦役に就いて居る。」

といふことが判明つた。そこで急にヘンリーを助けんものと家内一同打ち集うて、いろく方法を考えて見たが、母は老體の上に多病、次兄は生活のため寸暇もない有様、唯だ我身のベチーアムボスだけが、まだ自由の利く方であるので彼女は率先して、この任に當らうと決心し、

「チト出すぎたやうですが、兄様のことについては、妾を便に出して下さいませんか、屹度露國皇帝に御すがり申して、兄様を救ひ出すやうにいたします。萬が一それが成就しないなら、二度とこの家の閫をまたぎません。」

と熱心に申したが、母は

「御前の志しは感心ですが、左様な繊弱い年若の身で、どうして左様なことが出来ましますか。」

と、多少氣遣はしい調子であつたが、差當りこの役目を荷ふのは、彼女の他に

ない。漸くその希望を許すことにして、相當の旅費を與へ、露都ベテルブルグに出立させた。健氣な彼女は、住み慣れた故郷を後に、淋しい一人旅を續け、幾多の辛苦を積んだ末、ベテルブルグに到着した。早速警官に長兄が無實の罪に呻吟せる由を述べて哀訴し、いよいよ歎願書を草して内務大臣に宛て、長兄の赦免を懇願に及んだが、中々採用されさうでなく、再三再四却下された。

「この上は是非に及ばぬ、皇帝陛下に直訴するより途はない。」

と、決心の臍を固め、皇帝が行幸の途中に御待ち申し上げて、直訴したけれど何時も守衛のために叱り飛ばされて、その志しを達することが出来なかつた。

兄思ひの彼女は、朝な夕な赦免のことばかり思ひつゞけ、

「兄様は決して他の女を誘拐すやうなことはしません。あはれ全く全く無實の罪に陥つたのです。これは赦免されるのが至當です。妾はこの目的で遙る

この都へ来たのです、故郷を出る時、萬一兄を救ひ出すことが出来なかつたれば、二度と故郷の土を踏まぬと申して參つたのです。故郷には病身の老母が居ります。それにも逢ひたいのですが、兄の赦免されるまでは仕方がありません。可哀相な兄様です。妾の生命はどうでも宜しいから、無實の罪に泣く兄様を救ひ出さねばなりません。」

と、熱涙は頻りに双袖を濡ました。この哀れな兄思ひの少女のことが、皇族アライスの耳に入り、

「この輕薄の世にも、左様な優しい少女があるか。」
と非常に同感され、

「自分は微力ながら少女のため、皇帝陛下へ取りなして、その優しい志しを成就させやう。」

と、少女を呼び寄せ、禮服を貸し與へて皇帝に拜謁せしめられた。

「この機会を逃しては、最早や御願ひ申上げることが出来ない。」

と覺悟し、自から兄の冤罪を明かにして、赦免のことを嘆願に及んだ。皇帝も

少女の友愛厚さに感じ給ひ、破格に赦状をつくらせ給ひて、彼女に與へられた

彼女は雀躍して喜び、即日長兄の流竄地なる西伯利亞に向つたのである。

〔相手〕……相手に對するに常に相手を立つる心得あれ……………(獨 步)

〔輕薄〕……誠心實意、必ずしも交際の則に非らず、世は輕薄なればなり……………(獨 步)

〔公德〕……公德は私憤を沒せざるべからず……………(獨 牛)

〔嬌性〕……人は己れに克つと謂ふ、されど性を矯むるは天を傷るなり……………(獨 牛)

〔正義〕……いくら言葉巧みに辯解が立つても正義は許さぬ……………(激 石)

八五 荒野の一少女

西伯利亞の天地は氣候惡しく、人口稀れに森林深く、猛獸の害多く、盜賊の跋扈激しい處で、男子さへも單身この地を横斷することは、中々の困難である。況して、纖弱い少女の身では、一層生命の危険があるも、少女は左様ことを考えて、躊躇ふ餘裕がない。兄を思ふ一心岩をも劈く勢ひ、或は森林の中へ迷ひ入り、或る時は露滋き野邊に冷けき夢を結び、又た或ひは風雨に惱みて悪寒を覺え、或る時は飢餓のために一步も行けぬ苦境に陥りなどして、荒野を辿ること數百哩、身も心も打ち疲れて、どうすることも出来ぬやうであつたが、兄のためと思つて急に元氣を振ひおこし、漸くバリンスカー城に達した。早速城守に逢つて、皇帝陛下から賜つた赦状を見せると、城守は少しく氣の毒さうな顔つきして、

「實はね、最早その赦狀は間に合ひませんよ、氣の毒だが、ヘンリーは去年

足に腫物が出来たため、到頭全癒らずに死んでしまいました。今少し早ければ宜いのになあ。」

と力なげに云つた。これ聞いた彼女は、一時に失望して、氣絶せんばかりの驚きに打ち倒れた、

「嗚呼、今少し早ければ、宜かつたのに惜しいことをした。」

と嘆息したが、一度死んだ兄を蘇生らすことは出来ない。せめてその遺物なりと携へゆかんとて、城守に調べて貰ふと、ヘンリーが血涙の痕とも見ゆる、果敢なき筆走らせし書き物が残つてあつた。それを貰ひ受けて城守に別れを告げ又たも元來た道を辿つて露都へ引きかへした、絶望に陥つた少女は、露都で重き病に罹り、生命危篤の様子であつたが、皇族や貴婦人などの恵みによつて全快し、皇帝陛下の御仁慈によつて、その年の冬恙なく歸國したのである。

- 〔中心〕……品性の中心は信實と自信となり……………(獨 歩)
- 〔眞美〕……眞と美とは吾が有なり、吾これを取らざるべからず……………(獨 歩)
- 〔積誠〕……誠は積まざるべからず、情意を誠にして眞理と人情を求めよ(獨 歩)
- 〔嫉妬〕……嫉妬は愛の半面である……………(漱 石)
- 〔條件〕……愛に吾れ人が生活の第一條件なり……………(樽 牛)

八六 内助の力

丸子女史は、波山焼(陶器)の發明者板谷嘉七の妻である。嘉七は前金澤高等工業學校の教授であつたが、高村光雲翁に彫刻を學んでから、

「彫刻を施した陶器を焼いたら面白からう」

と考へた。その間二三年經つて漸く成案が浮び出たが、それには相應の資金と

時間とが必要である。嘉七は早く着手したくて仕様がな、その爲めに學校を辭すると、一家の生活に故障が出来る、如何したものかと考へて居つた。この體を見て女史は、

「御氣の毒であるが、妾さへ居なければ、思ふ通りのことをなされるであらう。」

と堅く決心して、夫と相談の上三人の子供を伴つて里方へ歸り、郷里に手藝女學校を開いて若い女達を教へ、自から生活を支えて居つた。嘉七はいよく學校を退いて種々の準備に着手し、その翌年東京に出て工場を設け、いよく波山焼の製造に従事しやうとして、女史を呼び戻した、女史が東京へ着くと、最早一切の準備が整ひ、残るものは窯を築くだけであつたが、資金を他所から借りた譯けでもなく、獨立獨歩で行かうといふので、嘉七は手づから窯を築くこ

とになつた。この窯は倒燗圓窯と名づけ、地上八尺、周圍四丈餘もある煉瓦造りのもので、これを築くのは、非常は困難であつた。嘉七は朝から晩まで眞黒になつて働き、女史は子供を脊負ひながら、煉瓦を斷り、或は泥を練り、砂をバケツに入れて、十町も離れた處から運び、かくて約一年の後ちその窯が出来上り、いよく燒きの方にかゝることになつた。嘉七は肥前から土を取寄せ、種々の形を造り、趣味の多い圖案や、彫刻などして燒くのであるが、生地から初めて物にするまで、四十四餘の手數を要するのである。されどその苦心の甲斐あつて、その陶器へ青味がかつた貝の色を出した蝶貝の名刺皿は、皇太子殿下から御買上げの光榮を蒙つたといふことである。

〔自信〕……自信なき人は己れの感情を披瀝するの勇氣なし………〔獨〕
〔男子〕……男子の貴ぶは精神氣慨だ………〔藍〕

【一寸】……人間は一寸したはづみで善くも悪くもなる………(蘆)
 【趣味】……詩を知らぬ人が趣味の問題に立ち入る権利はない………(漱)
 【文章】……文章は人間の大きな技なり大なる寶なり………(獨)

花 石 歩

八七 提灯に釣鐘

備中の藩校興讓館の師範に阪谷朗盧といふ儒臣があつて、夫人京子にも亦た學に深かつた。されば筆執る手にも薪水の勞苦を厭はず、私かに子弟の教育を助けて居つた。一とせ恐ろしい凶歳に、一藩擧つて大節約を實行した時、朗盧も已むなく給費塾生の數を減らさうとした、すると、京子は、
 「平常ですら窮鬼に逐はれて、居候をして居りますのに、況してこの不作、出されたものは如何なり行きませうや。」

と、その不可を諫め、己のが衣服髪飾を惜しげもなく賣り捌き、尙ほも召使を廢して親から水仕事の勞を執り、やつとのことに給費生を養つた夫人には四人の子供があつて三人はすでに歿し、季子は法學博士の阪谷芳郎である。澁澤男爵は夙に芳郎の人物を見込んで、自分の娘をこれに娶さんと思つたが、夫人の京子は、

「提灯に釣り鐘、つり合はぬは不縁のもと、こなたは貧乏學者でありますもの。」

と劍もほろゝに答へた。すると媒酌人は口を酸くして説き立てるので、京子は更に改つて、

「我が家には我が家の家風があります。第一に喜んで水仕事の勞に堪え、これの子孫に傳へるものでなくては、嫁御寮の資格はありません。」

とやつた、すると、媒酌人はその邊は御心配はいりませんといふので、漸く結婚の式も挙げたのであつた。

- 〔危険〕……世の中に分らない人ほど危険なものはない……………(漱)
- 〔不過〕……人に虚榮と我念との池に浮沈する芥に過ぎず……………(獨)
- 〔衝突〕……人間として衝突は自然の約束であります……………(蘆)
- 〔人間〕……人間は好きで働くものだ、論法で働くものぢやない……………(漱)
- 〔二面〕……一面の人はたゞ一面の人を見る……………(櫻)

石) 歩) 花) 石) 牛)

八八 六文の扇面かき

花蹊女史は攝津の郷土跡見重敬の女で、天保十一年の生れであるが、その頃は運悪くも、不慮の災厄のため甚だしく衰微し、両親は近所の子供に讀書や習

字を授けるを業として居つた、それで女史も四五歳から両親について、早くも四書の素讀などを學びはじめ、又た父が頗る能筆であつた所から、習字は殊に充分な積古が出来たのであつた。かくて女史が七八歳の時分には、稽古に来る弟子の數も、両親では世話を仕難るほどに増えたので、女史も姉の千代瀧と共に、四書の素讀を授け、又た習字の清書を直したりして、日夜その手助けを仕たのであつたが、女史は他人を教へるばかりでなく、自分も亦た親さへ知らぬ間に勉強して居つたのである。斯かる間にも絶えず苦にして居たのは、跡見家の再興といふことであつた。両親や親族は、女史が已に妙齡に達したので、頻りに縁談を持ち出したが、女史は何時も堅く拒んで聞き入れなかつた。女史も女に生れたからは、他へ嫁に行くのが、決して厭なのでもなく、又た人妻となるのが至當であることも能く承知して居たつが跡見家の再興を志して居た女史

は、獨身で居る方が、その志しを遂げるのに都合がよいと思つたから、それで聞き入れなかつたのである。所でその志しを遂げやうとするには、まだく勉強が足らぬ、まだく修業する必要があると、氣の附いた女史は、更に京都に出て宮原節庵から漢籍を、圓山應立と中島來章とから繪畫を學ぶことに仕たのである。女史はこの間に一度も學費を親計に仰いだことなく、外國行きの扇面を一本六文で、一夜に百本位書いては、學費の足しと仕たのであつた。かゝる苦學を仕て居たのは、十七歳の時から三四年の間で、それから大坂に歸り、中の島に家塾を開いて、子女の教養に力を注ぎ、傍ら自分も亦た山陽の門人後藤松陰の門に通ふて、詩文を究めた。かくて女史は明治三年の冬一家引きつれて上京し、間もなく跡見女學校を創立した。以來好運の満潮に掉して今日の隆盛に至つたのである。東京に移つてからは、女史の名更に高く、畏きあたりの

上聞にも達し、明治五年 皇后陛下の尊顔に咫尺し奉り、一首をとの上意に、女史は取りあへず、

春の來て谷の鶯けふよりは

雲井に近く名のりそめける

と詠み、殊の外なる面目を施し、その後も屢ば御前に伺候するに至つたのである。又た韓國の使節渡來の時などは、外務省の薦めにより會見して、詩の贈答などをしたこともあつた。

- 〔恥辱〕……家を粗略にするのは、女の恥辱です……………(蘆花)
- 〔人物〕……田舎者の精神に文明の教を施すと立派な人物が出来る……………(漱石)
- 〔金持〕……好い娯持ちは金持ちである……………(蘆花)
- 〔自由〕……生活の墮落は、精神の自由を殺す……………(漱石)
- 〔利己〕……人間は利己の動物たるに過ぎず……………(獨歩)

八九 四文の味噌

精 神 修 養

土佐藩士に佐々木の四文味噌といはれるまでの貧乏神があつた。祿百五十石を食んでも、昔から押し押せの借金に引けて、日々味噌を四文買ひする始末、住宅も疊はバラ／＼障子はガタ／＼、丸で古寺の化物屋敷のやう、其處へ主人公より八歳下の御嫁様が來た。貞子と呼ばれ、誦見高くて、浮いた色のない婦人であつた。両親は佐々木の貧しいのには二の足を踏んだが、貞子はその人物を見込み、自から進んで嫁に來たのである。主人公は素より一個の偉人、百萬の黄金にも換へ難い學問といふ寶の庫を胸に藏めてゐた。けれど四文味噌の暮しであるから、到底書籍は買はず、人に借りては讀み、讀みては寫したが、寫す草紙の代にまで窮したことも屢ば／＼であつた。貞子は深くこれを憂ひ、手

美 女 小 娘

内職に綿を紡ぎ、細き火影の下に夜を更かし、僅かに得る三四錢をその料にあてた。蛟龍は久しく池中のものにあらず、維新の際に奇勳を奏して、遂に樞密顧問官侯爵佐々木高行と名乗り、畏くも姫宮方御養育の大任を全うし、多光多榮の生涯を終つたのであるが、斯る身分たらしめたのは、半ば夫人貞子が内助の功といはざるを得ない。

- 〔美妙〕……冷へたる鐵にも、打てば美妙なる響あり……………(樗牛)
- 〔證據〕……話の延びるのは、氣の延びた證據である……………(石)
- 〔親泣〕……酒は親を氣の毒させる、酒は親を泣かせる……………(蘆花)
- 〔愚答〕……當り障りのない答は、大抵の場合に於て愚な答である……………(漱石)
- 〔歴史〕……歴史は人生の連続せる活動なり……………(獨歩)

九〇 菩薩の十兩

田中平八といふよりか、天下の絲平と一言いへば、ウンと合點されるほど大金持も、初めは天保銀二枚で、空腹を抱へて東京三界をうろつき、根が強情な男だけに、饅頭一つで、又たも七里の道を歩いて横濱に來た。外國人相手に濡手で粟の一と仕事と思ふたが、それも徒らに思ふばかり、雲のかけ橋及びもつかない。流石の平八も進退維れ谷まり思案なげ首、こゝで何にでも遇はなかつたら、恐らく絲平とも何ともいはれないで、唯だの平八で一生浮ばれなかつたかも知れないが、平八の身にとつて大悲大慈の觀音菩薩が一人現はれた。それは神奈川の或る金貸の娘、平八が末を見込んで、まだ部屋住みの身でありながら、大枚十兩の資金を貸し與へた。平八はこれに力を得て勇氣日頃に百倍して實業界に横行闊歩、遂に天下の絲平とまで漕ぎつけたのである。

- 〔薄弱〕……女性の品性に誠實を缺くは薄弱なるが故なり……………(獨 步)
- 〔毒蛇〕……嫉妬は女の身を亡ぼす毒蛇なり……………(蘆 花)
- 〔確實〕……碑銘を信ずる方、女子を信ずるより確實なり……………(獨 歩)
- 〔評判〕……偉人の妻に評判の好いのは滅多にない……………(蘆 花)
- 〔上手〕……女を見るのは、矢張り女の方が上手だ……………(石)

九一 盲目の良人

柳橋絢子女史が幼少から學問に志したのは、全く自分の精神の修養に資するためであつたが、時勢の變遷は女史をして轉た生活の困難を感ぜしめ、その學徳を餘儀なく世上に發表せしむることになり、従つて我が國の教育界に貢献するところが、多大であるため、特に勳六等に叙して寶冠章を授けられたのである。女史は天保十年二月大阪に生れ、父を牛尾田庄右衛門といつて、代々の家

業は造酒であつた。女史の祖父は市人ながらも讀書が好きで、越高洲の門人となり、父も亦たこれに師事して、修學を怠らなかつた。女史は平生その言行を見聞して、良い感化を受けたことが少なくなかつた。女史十歳の時、父から心學童話の中の、

「松の曲れるは、醫者を索めて治せども、心の曲れるは治さんともせず。」の一節を話して聞かされてから、精神の修養には、讀書に如くものはないと思ひ起したのである。されど當時は、世間一般に、女子に學問の必要を認めて居なかつたので、修學などは思ひも寄らなかつた。それで女史は、僅かに夜分父から大學の素讀を授かる位、それも商賣が忙しいので、途絶え勝ちであつたが、十三歳の時父から經典餘師といふ書物を買つて貰ひ、爾後は玉篇や評註を便りにして、單獨に勉強したのであつた。又た書字は五歳から稽古を始めたが

それとても別に師匠についてゐるはなく、尙ほ後中には、父には明さず、唯だ母の計ひで、三瓶信庵の許に通ふて、書法を學んだこともあつた。この女史の母も普通の女ではなかつた、商賣の手傳から金錢の出納、子供の教育、婢僕の使用まで、萬事を抜目なく處理して行つたのであつたから、七人の子供の長姉に生れた女史を、學問ばかりに耽らせて置くやうなことはなく、弟の着物を繕はせ、妹の頭髮を結はせなど仕たので、女史も十三四歳の頃には、既に裁縫はいふに及ばず、その他普通の家事は、一角出来るやうになつて居たのである。女史はかく日々家事に逐はれながらも、尙ほその隙を偷んでは、書物を繕いて居たが、一心は恐しいもので何時しか四書五經を終つて、十六七歳の頃には、何うか斯うか字引を煩はさずに、春秋をも讀み得るまでに進んだ。折柄、弟が奥野小山の許に通ふことになつたので、女史もその附添の名の下に通學し、晝間

は又た何かと母の仕事を助け、朝皆の起きるまでと、夜皆が寝てからとに、漸くその復習を仕たのであつた。この奥野小山の友人に、棚橋大作といふ人があつた。幼少から儒學に志したが、十六七歳の頃眼を患ひ、遂に失明した爲めに、文字ある妻を娶り、それに代讀させて、宿志を遂げやうと望んで居つた。所で小山は、かねて女史が家事に逐はれて、讀書の暇のないのを嘆いて居るのを知つて居るので、これに勝る好配はあるまいと、やがて自から媒酌の勞を取り、女史は十九歳で棚橋家に嫁ぐことになつた。郷里美濃に移つた時は二十一歳で、まだ初々しい丸鬚姿であつたが、數々なる浮世の潮の満干と共に家産は傾いて了つた。されど女史は身を粉に碎いて、家政の遺練算段をすると同時に良人の爲めに少しも筆硯を離さず、更に失明の不自由を感じしめなかつた。それからは、尾張の一の宮に行き、又た名古屋に移り、更に東京に上つたが、そ

の間常に學校に職を奉じて、家計を支へたのである。女史は出るも引くも足手纏ひばかり、盲目の良人をかばふ片手には、三人の子女をも見なければならぬ、然かも行方も知らぬ旅から旅へ迷ふた當時の事は、我等が想像の及ぶ所でない。女史が文久元年に開塾して以來、大正の今日に至るまでに教育した子弟の員數は、果して何千人、何萬人であらう。女史がこの久しい間、専ら賢母良妻の養成に勤めて、一日も倦まなかつたのである。女史は素より讀書を實用に供へる人で、詞章などには重きを置いて居ないのであるが、寶冠章を賜はつた時、

たくひなき恵みの露に花ささぬ

あいきの梅も若がへるまで

と詠み、聖恩の極渥なるに感泣したのであつた。

〔齒痒〕……牝鶏の晨するばかり齒痒いものはない……………(蘆花)
 〔眞理〕……眞理は裸かにも眞理たるべし……………(櫻牛)
 〔天下〕……天下の人にはみんな泥棒根性がある……………(漱石)
 〔武器〕……愛嬌といふものは自分より強いものを略す柔かい武器だ……………(漱石)
 〔得意〕……得意の前には腐敗し、不如意の前には世を恨み人を怨らむ……………(獨歩)

九二 賊双の鏑

支那の唐時代の樊彦琛の妻、魏氏は、彦琛が病んで危篤に陥り、今はかうと見えたる時、妻は夫に向ひ

「私が御當家に参りましてから、早や二昔の上、この世からなる極樂の、いと結構に暮らさせて戴きましたのに、今はこの悲しい始末、何うぞ私も同じ

穴に這入りまして、黄泉の御供がしたう存じます。」
 といつて泣き崩れると、彦琛は聲を勵まし、

「死生は人間の常道であつて、更に恨みはありません。お前は此際大に奮發して、子供の教育を一身に脊負ひ、一人前の人間となすやう、務めなくてはなりませんよ。お前が一緒に死んだとて、後の者が困るばかり。」

と、懇々と諭した。彦琛が死んでから、李敬業の亂に、魏氏は不幸にも賊の爲めに捕へられたが、賊は魏氏が絲竹の道に堪能なのを知つて居て、箏を弾けよと嚴命を下すと、魏氏は天を仰いで、

「夫の不幸にオメ／＼生き延びて居るさへ心ないのに、今またこんな憂目に逢ふのか。」

と、嘆息しながら、刀で己の指を斬り落して地に投げ棄てた。賊は尙も懲り

ず、指を貸さねば體を借らうかと、はや怪しからぬ舉動に及ぼうとするので、魏氏は死物狂ひにこれを拒んだ。賊等は大に怒つて劍の白刃を魏氏の頸にあて

「いふことを聞かなければ、これがお見舞申すぞ。」

と威嚇したので、魏氏はいよく聲を勵し、

「お前達のやうな狗盗にこの身を任かさうや、殺さばさあ殺せ。」と云ひ放つて、終に賊の刃の錆となつた。

〔冷笑〕……怒罵は忍ぶべし、冷笑は忍ぶべからず……………(蘆 花)

〔鬱憤〕……人の鬱憤は何處にか漏れずには居らぬ……………(蘆 花)

〔感情〕……大膽に行動する能はざるは、感情の低ければなり……………(獨 歩)

〔比較〕……比較は最も能く吾人に人心の變化を教ゆ……………(獨 歩)

〔片腹〕……愚にして賢と心得てゐるほど片腹いたい事はない……………(漱 石)

九三 子供の過失

支那の宋時代、大中大夫程响の妻侯氏は、舅姑に仕へて孝順の聞えが高かつた。夫の响は剛直嚴格であつたが、いつもこれに仕へることは、賓客に對へるが如く、小事も必ずその命を聽き、内助の功が頗る擧つた。而かも家を治むるには、嚴肅のうちに慈愛の温味を加へ、賤しい奴婢などは餘程大事に取扱つた。たま／＼子供等が奴婢を叱りつけることがあると。

「賤しくても人ですよ。お前達と別に異はりがありますか。」

と、これを窘なめた。されど子供等の過失と來ると、少さければ自身で詰責を加へ、大きければこれを响に通じ、心の底から改めさせなくては、決して承知しない。或る時、

「母たるものが、子供の過失を蔽ひ匿くすと、父はこれを知らず、つい正さず了ひとなる。これが世に不肖の子の多い所以です。」

といつたが、これ全く侯氏が實驗から出た千歳不磨の格言である。男の子も多くあつたが、皆な亡くなつて二人になつた。されば其のいとをしさ限りなければ、教育振りには感心なことが多い、子供等と一緒に歩く時、道に轉んでも容易には抱き起さず、徐ろに

「静かに歩きなさい、静かに歩けば轉ぶことはありません。」

と戒め、又た着物や食事も、幼ない時から決して我儘を云はせず、萬事萬端注意周到に教育したが、その結果この二人の子供は、能くその徳器を成し、孔子の道の中興して、天下後世の儒宗とまでなつた。二人の子供は誰れあらう、宋の濂洛の六君子としては周茂叔、邵堯夫、司馬溫公、張横渠の人々と並び、道

學の五先生としては茂叔、横渠、朱文公の人々と、その名を齊しくせる程顥(明道先生)と、程頤(伊川先生)とである。

- 〔熱心〕……熱心は成功の度に應じて鼓舞せらる……(漱石)
- 〔知眞〕……能く眞を知るものに非ざれば偽を別つこと能はず……(樗牛)
- 〔天佑〕……意志のある所には天佑がごろ／＼してゐるものだ……(漱石)
- 〔枝折〕……あまり多く果實をつくる枝は折る……(蘆花)
- 〔怠惰〕……怠惰は身を腐らす錆だ……(蘆花)

九四 女は女らしく

備前岡山の領主新太郎の少將池田光政は、鴻儒熊澤蕃山を抱へて大教化を布き、名君の譽れを残した。光政の夫人は本多中務大輔忠刻の女で、母は天樹院

女は女らしく

女は女らしく

二五六

子福者であつたが、伊豫守綱政の外は皆な女であつた。夫人は

「女は女らしいのが宜いのです。何事も優やかに心を修練して、男を凌ぐな
どの考へがあつてはなりません。妻が良人を敬愛せぬため、種々面白からぬ
ことが出来るのです。夫婦となるのは、よくくの縁なのですから、たとひ
良人の容貌見苦しくとも、これを敬愛せねばなりません。女は内を治め、男
は外を治むる慣例ですから、内の事に心を用ねばなりません。大名は分擔
の役人があつて、内外の事を處置します。それで慈愛を旨として、臣下を愛
撫するやうになさい。嫉妬は謹みなさい。良人に誤りたる振舞あれば、物柔
かに諫めなさい。貧富に心を動かさず、境遇に安んじなさい。裁縫や衣服を
織ることは女子の務めの一つですから、これは是非知らねばなりません。」
と、教訓されたさうである。

〔東縛〕……人を束縛する者何處にある、東縛は外物に存せず、感情にあり(獨
〔淑女〕……良禽は木を擇んで棲み、淑女はよき紳士を擇んで嫁す……(盧
〔結婚〕……義理ある結婚に疎な例はない……(盧
〔攻撃〕……妾を置く餘裕のないものに限つて蓄妾の攻撃をする……(漱
〔人情〕……人情の最も其本然に動くは美妙を感じたる時なり……(獨

歩) 花) 花) 石) 歩)

九五 干せぬ濡衣

神奈川在の農七之助に小夜といふ娘が居た。恰度十八歳の時、小夜はいつし
か袖にも隠くせぬ、五月ほどの腹となつた。それを氣取つた親爺は、正直一途
のむかつ腹、むらくと、娘を引き据え

「ヤイこの女郎、面穢しめ、淫亂者め、さあ相手を拔せッ。」
と聲も震へて容易に言葉にならず、辛くもかうと片々にいつた。小夜は唯だは

干せぬ濡衣

二五七

らくと上氣して、そんな覺えはござりませぬと、いふも口の中。けれどそんなことでは、この頑固親爺が聞くものか、怒りの裏面は何かよ言譯いふてくれと心で願ふ親の慈悲も、今は駄目、

「馬鹿も休み〜いへ、勝手に孕む化物が何處にあるッ。」

と、泣き沈む小夜を引きずり起して、拳固を振りあげた。餘りのことに、母親は駈け込み、こなたも氣短な、怪我でもあつたらと、漸くに引き分け、

「若氣の過失は、世間に有勝ちのこと、情も父の怒りも、もとはあつて親心。」

小夜は唯だぐ泣くばかり。かくて一と夜を越し、翌朝は云ひ合はせぬと、よい答へが聞きたいものと、両親は小夜の起き出づるを待ち受けたけれど、日は高く野良へ出て働く時分になつても、小夜は姿を見せぬ、思ひつめて頭痛でも

と、母は一と間の障子に手をかけ、中を窺へば如何に、小夜の冷たい死骸の横はるのみ。されど検死の醫者の見立によれば、妊娠にはあらで脹満といふ病であつた。

- 〔氣焔〕……地位が出来たら氣焔はなくなる……………(蘆 花)
- 〔笑者〕……笑ふ者は、笑はれる者に笑はれる……………(蘆 花)
- 〔欲望〕……人の欲望は將來の大なる欲望の爲めに制せらるゝなり……………(獨 歩)
- 〔威張〕……人に威張るは積極的主義、人に頭を下ぐるは消極的主義……………(獨 歩)
- 〔弱蟲〕……弱蟲は親切なものだ……………(漱 石)

九六 貞 操 節 義

終生を矯風、慈善や、育兒の業に捧げて、世間から佛岩女と敬はれ、又た貧民の友、孤兒の親と呼ばれた瓜生岩子は、文政十二年に生れ、磐城國耶摩郡喜

多方の油商渡邊利左衛門の女である。この渡邊家は先祖から富裕に幾多の召使を置き、随分手廣く取引を仕て居つたが、天保四年から七年へかけての天災續き、凶作續きで、商賣は全く火の消えたやう、それに八年には、利左衛門が疫病で歿くなる、家藏は焼けるといふ不幸に不幸が重つて、急に零落の淵に沈んだ、當時岩子は漸う九歳、亡父の中陰が濟んでから、母に伴れて弟の半治と共に、その里方に歸つたのである。斯ういふ譯けで、渡邊家に生れながら、母親の里方の瓜生氏を名乗るやうになつた岩子は、情深い祖父母に許で育てられ、十四の時若松城下に住む叔父山内春瓏といふ醫者の方へ、行儀見習に出ることになつた。岩子は叔母から裁縫や禮式を習ふ傍、また叔父から讀書習字算數などの教を受けたのであつた。當時この地方には、大抵は生活の困難なのが原因で、墮胎といふ蠻風が頻りに行はれて、春瓏の許へも密とその藥を貰ひ

に來るものが少くなかつた。されど春瓏は素より仁義の道に明るく、殊に憐愍の情の厚い人であつたから、何うしてそれを聞き入れやう、却つて懇ろにその不心得を諭して、尙ほ金品をさへ惠んで遣るのが常であつた。始めの間は、岩子も然ることのあらうとは、少しも知らなかつたが、頓てそれを悟ると共に、天性情深い岩子は、陰からも日向からも、叔父の善根を培ふことに力め。又た叔父が矯風の癩にもとて『萬民こゝろの鏡』といふ書物を著した時、尤も熱心にその手助けを仕たのであつた。兎角するほどに、岩子も十七歳になつたので、佐瀬茂助といふを婿に迎へ、新夫婦は若松三日町に呉服店を開いた、始めの間は家内も少なく顧客も少なく、従つて収入も少なかつたが、正直と勉強とに追つて貧乏神はない。十年の後には見違へる程の繁盛、番頭小僧も置き、土藏まで建る身分となつたが、岩子が二十八歳の春から、夫の茂助が大病に罹つ

た、岩子は店の勘定から夫の看護、三人の子供や小僧の世話までも、唯だ一人
 で残る方なく行つて居ると、その翌年に夫の病氣を任せて、杖柱と頼んで居た
 叔父の春瓏が、僅かの間の患ひで歿した。折柄一旦持上げた家運も、恰度
 暑の西に傾くやう、弱り目に祟り目で、多年使つて居た番頭が、店の金を搾ん
 で驚飛をする、夫の病氣は未だ癒らぬ、子供はだんく大きくなる。岩子は
 凝座して居られなくなつた。木綿着物に草鞋穿き、風呂敷を背負つて、朝早く
 から夜も遅くまで、近郷近在へと行商に出掛けた。岩子は毎日このやうに汗
 水垂らして働いたのも、全く夫の病氣を癒したいばかり、母に苦勞の掛けたく
 ないためであつたが、その心盡しの効もなく、夫は歸らぬ旅、その翌年母も歿
 くなつた。この貞操節義は、何時しか藩主の耳に入り、その行狀を賞められ
 た折紙に、金子さへ添へて賜つた。

九七 菩薩の紀念

〔立腹〕……立腹は改革の好手段にあらず………(蘆) 花
 〔立身〕……辛抱は立身の本、節儉は立身の綱………(蘆) 花
 〔自由〕……勞苦を選んで自由を取るべし………(獨) 歩
 〔親友〕……果實の熟する如く、機熟して相合ふ所に眞の親友あり………(獨) 歩
 〔呼吸〕……世を舉げて人は覆面の中に呼吸せり………(樗) 牛

慶應の四年、世は維新の變革で、勤王の風が、鳥羽伏見に漂ふて居た佐幕の
 雲を掃ひ初め、降るや矢彈の霰、血潮の雨に濁る徳川の流れの末は、遂に會津
 の戦争となつて、殊に手痛く攻め惱されたのは、若松の城であつた。城中の將
 士は最後まで戦つた。老幼男女までも戦つた。そして國難に殉じ、君恩に報い

た。取り分け白虎隊は飯盛山の夕の嵐に散つた。岩子は復たとなないこの悲惨な戦争を見た。見たからには捨て、置けぬが岩子の氣性、父に離れて泣く子、子を索めて狂ふ母、老幼病傷の人々を自宅へ伴れ歸り、近隣の家々へも預け、庄屋肝煎を説いて食物を集めて配り歩いた。又た蒲團や着物を縫ふては與へ、藥を煎じ病を護つて、夜も死んど眠ることがなかつた。かくて年も明治と改元せられると共に漸う戦争も收まつたれど、歸る所を失ふた家中の子女、多くは喜多方近在の農家に割當となり、百姓の土墾業を仕て居るのを、岩子は見るに見かねて、幼學所の設立を思ひ付き、その設立の件を願ひ出たが、民部局出張所は、一旦朝敵となつた者の子弟教育のことゝて、容易に許されない。詮方なく東京の本局へ哀願し、漸うのことゝで聞き届けられた。岩子は大に喜び、早速二畝ばかりの田地を借受けて校舎を築き、近所の家々から古机や古本を集めて

の開校、科目は讀書習字と算盤勘定、その教師は淺岡源三郎といふ人が擔任し岩子は朝から晩まで子供の監督、さうして親兄弟の活計の補足にと、養蠶、織、縫紡、先方の好みに應じて手の職を授けたが、その翌々年四年には小學校令が發布せられ、岩子の苦心した學問所は閉鎖することになつた。たま／＼東京の深川に、貧民孤兒を收用する救養會所といふがある聞き、岩子は雀躍して喜び、早速その會所の模様を參觀し、自分の志望を述べて、實地見習を頼み、近邊に借宅して毎日此處へ通ふこと約半年、この間に所員が集めて來る古着や廢物の始末から、孤兒の世話や病者の看護、職業の授け方法までも實習し又たこれ等の研究の餘暇に、本所や深川の貧民の生活状態をも視察して、大に得る所があつた。そこで岩子はその分所を郷里に設けやうと、歸途に就かうとしたが、旅費が何うも不足なので、深川の或る魚問屋に行き、買へるだけ干

物を買ひ、道々それを賣りながら漸く若松へ歸り、早速救養所の設立に奔走した。されど世間は容易に岩子を信じてくれぬ。又たそのいふことを用ひてくれぬ。救ひを求むるものは多いが、岩子に力を貸して、他を救ふものは少ない。で岩子は先づ自分一人で、この事に當つて見やうと決心し、長福寺といふ廢寺を借りて分所としたのであつた。岩子はこの廢寺に居た時分に、尤も苦心を仕たのは墮胎を防ぐことであつた。制令禁止の力は有るでなし、勸善懲惡の教も効がないので、岩子は土地の觀音講に加入した。寺には數多のうら若い女が群れ集る。話の間に誰某は妊娠だといふ。今度は間引くらしいと聞くと、岩子は早速その家へ出掛けて行き、

「誰某は子供を欲しがつて居るが、生れたら下さるまいか。」と頼む、親は素より承知。いよく生れると臍節に襁褓まで添へて祝ひに行く

一月も経て赤子が可愛くなつた頃、改めて「下さい」といひ出すと、大抵の親は「手離しかねる」と斷る。それでは仕方がない、又た他へ頼むから、大切に育てなさいといふて歸る。岩子がこの人情の機微を利用して、救つた赤子の命は殆んど數へ難いほどである。又た岩子は近所の女子達に、裁縫や機織を教へて居た。資産家の子供は、一日に白米一升の謝禮で預りもした。貧窮人の子供はその殘米で食客と同様に置いてもやつた。その他に孤兒も居れば不具も居る。その中の働けるものには、相應の職を授け、出來上りはそれと擲きをつける。そして觀音講にも出掛けもし、産婦の訪問もする。起きるから寢るまで、働き詰めに働いて、暫時も體を休めることを仕なかつた。その他廢物利用的才覺によつて、人を救ふたことは數限りもない。佛のお岩とか、瓜生菩薩の名は一時遠近に響き渡り、明治二十九年朝廷その功績を賞して藍綬褒章を賜はつた

が、その翌三十年に病歿した。げに人は一代名は未代で、岩子は病歿したけれど、その餘徳は四恩瓜生會と共に世に存し、常に人の記憶を新にしつゝある。人若し淺草觀音に詣でたれば、必ず足を堂の左に向けるが宜しい。そこに建てられて居る老尼の銅像こそ、岩子の事業を千載の後までも傳へやうとする尊い記念物である。

- 〔薄弱〕……薄弱は悲慘の極なり、剛毅の徳は人間の第一なり……………(獨) 步)
- 〔雛形〕……船は社會の雛形なり……………(蘆) 花)
- 〔理想〕……理想は空想に非ず、事實と實際とを思へ……………(獨) 步)
- 〔世界〕……世界を通じて足の下は火なり……………(蘆) 花)
- 〔事件〕……事件は大概逆上から出るものだ……………(漱) 石)

九八 四書の假名書き

繁乃(しげの)は上杉家(うへすぎけ)の臣黒井四郎左衛門(しんくろあま)の女(むすめ)で、文化元年(ぶんくわげん)米澤(よねさわ)に生れた。幼い時(おきなとき)から母(はは)の手一つ(て)に育てられ、年頃(としごろ)になつて同じ藩士(はんし)湯野源三郎(たのげんざぶろう)といふ(い)ふを迎へ(むか)へ、その間に信藏(のぶざう)と呼ぶ一子(ひとこ)を擧げた(あ)が、聾(むか)は不圖病(ふとやま)みついて、文政六年(ぶんせいねん)の冬(ふゆ)遂(つひ)に歿(ぬ)くなつた。残(のこ)るは二十(はたち)の繁乃(しげの)と老母(らうぼ)と嬰兒(あかご)のみ。素(もと)より貧(まづ)しいので、貯蓄(ちよちく)どころか、明日(あす)の糧(かて)はすでに繁乃(しげの)の肩(かた)にかゝつて來(き)て居(ゐ)た。されど中々(なかなか)の氣丈者(きぢやうもの)悲痛(つう)の中(なか)にも、その善後策(ぜんごさく)を講(か)うすることを忘(わす)れなかつたのである。繁乃(しげの)はその細腕(ほそで)もて一家(いっか)の生計(せいけい)を維持(維持)しゆかんとて、晝夜(ちゆうや)羽織(はおり)の紐(ひも)を組(く)んでこれを賣(う)り、或(ある)は糸線(いとくし)の賃(ちん)仕事(しごと)に骨身(ほねみ)を惜(おし)まず働(はたら)いて老母(らうぼ)に孝養(かうやう)し、一子(ひとこ)信藏(のぶざう)を育(そだ)て、少(すこ)しの手落(て)もなかつたのである。殊(こと)に繁乃(しげの)は己(おの)の全精神(ぜんせいしん)を一子(ひとこ)の上に灌(そそ)いで、

『如何(どう)かして、亡夫(ばうふ)の後(あと)を繼(つ)がせて、立派(りっぱ)に家名(かめい)を揚(あ)げさせたい。』

と熱望(ねつぼう)した。そこで信藏(のぶざう)が七歳(さい)になると、隣(とな)りの漢學者(かんがくしゃ)粕谷翁(かすかひのおきな)に四書(しよ)の素讀(そどく)を

受けさせた。所が繁乃は貧苦の中に育つて、その日々の生活に追はれて、學問の一端をも修めなかつたので、僅かに假名文字ぐらいしか知らないので残念に思つて居た。現に信藏が粕谷翁の許を辭して家に歸り、日毎に四書の素讀を復習するのには、

『何處が誤つて居るか、如何して教へたら宜いか。』

といふことが、少しも分らない。それでは母親としての務めを盡すことが出来ないと、いろ／＼思索した末、その翌日から、信藏が家を出て、粕谷翁の許にゆくと、自分も後から出て、信藏の稽古を窓の下で聞き取り、その節々を假名書きにして、それを引合せて復習させた。かくて二年遂に四書全部を寫し終へた。後信藏は藩の學校興讓館に入つても勉學の効空しからず、殿様から特賞せらるるに至つたので、例の假名書きの四書も全く不必要となつた。され

ど信藏は、母の熱誠の籠つたこの四書を、

『その儘反古にするのは惜しい。』

と思ひ、母に請ひ受けて、大切に保存しやうと、その旨を母に告げると、

『あのやうな見苦しい筆の跡を、人に見られるのは恥かしいから、反古にして下さう。』

と云つたが、信藏は強めて請ひ受け、綴つて國字四書と名づけ、序をつけて子々孫々に傳へることに仕た。信藏は學成つてからも猶ほ志しを得ず、破れ底から月光を浴びる有様であつた。この頃月に一度登城して當番するのが例であつたが、その折の紋服さへ何時も質屋の庫に潜んで居つた。その前になると、繁乃は數日徹夜賃仕事して金を儲け前夜に、そつと受出して置くのであつた。されば、信藏は母のよい心懸けのため、次第に立身出世して維新の後、米澤藩

の少参事まで上つて、その終りを全うした。その母が五十歳で病死した折は痛悼、いふばかりなく、例の國字四書は何か吉事ある毎に取出して、母の恩を感銘したさうである。

〔口實〕……口實は爾を支配す……………(獨) 歩
 〔信心〕……世にも強きは自ら是なりと信ずる心なり……………(蘆) 花
 〔衝突〕……恐ろべきは感情から來る衝突である……………(蘆) 花
 〔夫人〕……夫の亂行は夫人の不幸と並び長ず……………(蘆) 花
 〔今昔〕……昔の親は子に食はせて貰つたのに、今の親は子に食はれる丈だ 漱石

九九 淋しい生涯

讃岐鹽飽の大領時國に、松風と村雨といふ二人の娘があつた。容姿の美しい

ばかりでなく、心様も美しい方で、両親に優しく事へた。この儘すめば、姉妹ともに幸福なのであるが、不幸にも、母親が早く歿つたので、父は後妻を迎へた。この後妻は邪なことばかりを喜び、先妻の忘れ記念な松風、村雨の二少女が容姿花の如く、心も清水のやうに濁つたところなきを妬み、折に觸れ事に望んで、いろ／＼父の時國に讒言をした。それとは知らぬ好人物の父は、後妻のいふことを眞面目に信じ、

「不届至極の娘共じや、手討ちにしやう。」

と憤つた。召使の者共は、いづれも姉妹に同情を寄せて、

「つまらぬことで御苦勞なされるのは、本當に御氣の毒に思ひます。さあ早く御辯解遊ばしませ。」

と諫めたが、姉妹はその冤罪を明かにすれば、繼母が酷い目に逢ふことは明か

である。

『それか御氣の毒な、それに不孝の罪を犯かすことになるから、この上は姉妹二人、一つ處で死にませう。』

と覺悟を決めて、少しも悪びれた氣色が見えぬ。召使共はその優しい心根を聞いて泣かされた。かくと見た松風の乳母の夫空兵衛は、

『左様なことを云つて居られては、如何な酷い目に逢されるか知れませぬ。』と、強ゐて姉妹を連れ出して、自分はその御伴になつて出發した。この事が早くも時國の耳に入つたのでいよく憤り、追手を出してその後を追はせた、やがて姉妹の姿を認めて返へせ、やらぬと呼びかけると、空兵衛は何を小癪など、これと渡り合ひ、追手を支えて姉妹を逃がしたが、空兵衛は到頭殺された。かくは姉妹は漸と虎口を逃れて、磯邊に近い船に打ち乗り、船頭等はその

事情を打ち開けると、渠等も深く同情を寄せ、船の纜を解いて沖の方へ漕ぎ出で、須磨の浦に着いた。その邊に住む漁者の長をつとむる者が、深くこれに同情して養なつたが、終に世の無常を感じて尼となつたといふ。

- 〔眼鏡〕……感情は得て眼鏡を曇らすものだ……………(蘆 花)
- 〔罪惡〕……戀は罪惡である、さうして神聖なものだ……………(漱 石)
- 〔自然〕……男女相愛して肉慾に至るは自然なり……………(獨 歩)
- 〔男眼〕……迷ひ易いは若い女を見る若い男の眼……………(蘆 花)
- 〔愛情〕……愛情は世に勝つ……………(獨 歩)

一〇〇 鏡臺の黄金

微賤から起つて、遂に土佐二十四萬石の大封を受くる身となつた、山内猪右

衛門一豊の功業は、その夫人若宮氏の内助によるものが甚だ多い。一豊が始めて織田信長に仕へた時、博勞が名馬を賣らんと牽いて來た、安土の諸士は皆なそれを見て、それを得たく思つたがその價が餘り高いので、誰れも買はうといふものがないから、馬を牽ひて歸らうとする。一豊は身の貧しいほど悲しいことはない、遣る瀬ない顔つきして歸つて來た。これを迎へた夫人は、

『今日は御顔色も常ならず、何か變つたことでも。』

と、尋たけれど中々話さなかつた。けれど餘り心配氣に尋ねるので、一豊は、

『いや何んでもないこと。然し貧は憂いものぢや。今日安土へ無双の名馬を牽いて來た博勞があつた。織田家の家中、誰れも皆な垂涎の態ぢやが、まだ誰れも手を出さぬ。價が高くてな。この一豊も御奉公のはじめでもあり、かゝる名馬に打ち乗りて見參に入らば、御屋形の御感はいかばかりかと思へ

ど、たゞ思ふばかりであるワイ。』

夫人はこれ聞き、そして馬の價はと問へば、黄金十兩と方のない聲、夫人は、

『左程までの御所望ならば、速かに召しませ。その黄金は妾が』

と、鏡臺の底から取出した。一豊は眼を見張つたまゝ、暫時無言であつたが、

『日來困窮極まりて御身も痛く苦しみに、かばかりの大金のある由を、一言もいはざりしは何故にや。』

と、いぶかりて問へば、夫人は微笑み、

『その御言葉は御尤もでござります。妾が嫁ぎまわりし時、父が鏡の下に入れてたまひたる物、その時の父の言葉に、これは常の事に用ひよと渡すにあらず、汝が夫の一大事の時にのみ參らせよ、ゆめ忘るべからずとの教へ。貧

しきは、世の常のこと、父の教訓と共に今日まで深く秘めて参りたれど、近きうちには御馬揃へもありと聞きまつれば、君は御奉公の初めにてもおはすること、名馬を求め給ふは、時にとつての一大事と存じましたれば。」

一豊これを聞いて大に感じ、誠に御身の恵み父君の御恩、謝すると言葉がないと、感涙を流しつゝ急いでその馬を買ひとつた。やがて都の馬揃への時、一豊は買ひ取つた馬に騎つて打ち出たに、忽ち信長の御目に止まり、猪右衛門いづれより、その馬を得たかと問はれしに、一豊事の由を答へたので、

「我が家士多きに、一馬を購ふこと能はざりしは、誠に上國の恥なるを、汝久しく浪人してありしと聞く、微賤の身を以て、この名馬を購いたること、余が面目である。武士の心を用ゆるは、方さに此くの如くなるべし。」と、又たもない信長の歡を得、一世の面目を施した。これが實に後年徳川氏に

ついで土佐を領し、二十四萬石從四位下までにのぼり著く出世の絲口であつたといふことである。

- 〔知耻〕 志を立つるの功夫は、耻を知るを以て要とす……………(一) 齋
- 〔迅速〕 迅速なる成就是、必ず亦た迅速なる破滅を招く……………(フ) エ ラ ン ド
- 〔希望〕 何人もその希望を盡く満足せしむること能はず……………(セ) ネ カ
- 〔自由〕 己れに克たざる間は自由なし……………(西) 諺
- 〔寶石〕 死後も猶ほ携帯するを得べき唯一の寶石は智慧のみ……………(ラン) グ フ オ ー ト

101 道ならぬ戀

正徳年間、勢州津の城主藤堂和泉守高久の家中に、二百石の職祿を食んで廣間番を勤める清水數馬といふものがあつた。數馬は同役の長谷川丹右衛門と互

に往來して、兄弟も及ばぬ親しさとなつたが、不圖した心得違ひから、數馬と丹右衛門の妻ムラと、人目を忍んで怪しい間柄となつたのである。最初は誰れも知らなかつたが、悪事千里を走るとか云つて、何日かその風説がチラホラ人の耳に入るやうになつた。すると數馬の妻美代は

「家の一大事何んとか、今の中に良人を諫めまゐらせねばならぬ」

と、事に託けて物柔かに諫めたが、迷へる數馬は却つてこれを煩さく思つて、更らに採用げず、丹右衛門の當番の留守には、その家に入り浸つて、ムラと酒宴を催うすさへあるやうになつたから、美代はいよく心配して、今度は機會を見て正面から諫めた。處が數馬は冷笑して

「何んだ、嫉妬を燒くのだね、それは黙つて居て貰はう、何にしやうと、拙者の勝手で」

と、頭から排斥するばかりか、その後は一層亂行が募つて、人の目を惹くことが著しくなつた。これには美代も胸を痛めて、世間の人に會はず顔がないと思ひつめたが、何にか決心する所があつたと見えて、急に顔色を和けてまめくしく良人に仕へたのである。或る日美代は良人に向ひ

「今日は一寸淺草の觀音様へ參詣いたしたう御座いますか、どうでせう」と請ふのであつた。その日は丹右衛門の當番であるから、自分には却つて都合が好いので

「それは恰度宜からう」

と許したので、美代は下女下男を伴れて、觀音様へ參詣しての歸途、並木の茶屋へ立ち寄ると、何氣なく女中に

「慥かお前の宿は此處から近いさうだから、一寸寄つて來たらどうなの」

と、女中はこれを聞いて、渡りに船と喜んで直ぐ宿へ出向いた。その後を見送つて美代は、下男に自分の決心を物語ると、下男はアツとばかりに驚いて

「左様な御短慮はなさいますな、是非御願ひですから」と、顔色青ざめて云つた。

「成程お前が心配して下さるのはよいが、何事も清水の家にはかへられませぬ。又た一つには、長谷川の御家の爲め、妾の思ふ通りした時は、直ぐこの手紙を小左衛門様(數馬の父)へ届けて下さい。これが一生の頼みです」と、固く決心した様子に、下男は強めて止めかねて、美代から託された手紙を受取り、下女下男は美代の御伴で家に歸つた。

〔美目〕……盼たる美目に魂を打ち込むものは必ず食はれる……………(漱石)
〔人生〕……人は善をなさむが爲めに生れたり……………(櫻井)

1011 喃れ武士の妻

その翌日美代は、數馬の出勤を送り出してから、女中を長谷川の家遣つて「急に奥様にお目にかつて、少し秘密に御話を伺ひたう御座います」と申し入れた。神ならぬ身のムラは、自分の生命が亡くなるのも知らず、急いで數馬の家に來たのである。委細の様子を知れる下男は、如何なることかと心配しながら、隙間から様子を見て居ると、美代は落ちつき拂つて、ムラを奥の一室へ請じ、時候の挨拶を述べてから

〔本領〕……自家の本領は自家これを信ずるの外なし……………(獨歩)
〔現實〕……現實は歩々に美しくしき夢を刺ぐ……………(芹花)
〔消息〕……人間の深き消息、悉く悲劇の中に暴露す……………(獨歩)

「すこし御覽に入りたいものが御座いますから、何卒暫時と、持ち出した白木の三寶、上には短刀が載つてある。これを見たムラは顔色を變へて

「これは如何したわけで御座います」と尋ねた。すると、美代は

「それは貴女に御覺えある筈で御座います」

とて、これまで數馬とムラとの關係あることを、それとなく諷して

「長谷川清水兩家平安のため、改心して自害して貰ひたい」

と云つた。ムラはこれを聞いて非常に驚き、その場を逃れんと焦慮つたが、美代はムラの利腕を取つて容易に放さず、とう／＼「免して下さい」といふが早いか、一刀の下にムラを刺殺し、返へす刀に自らも咽喉を衝いて、悲慘の最後

を遂げた。下男はその様子を見届けないうちに、アツとばかりに吃驚して、宙を飛ぶやうにして、數馬の實父吉武小左衛門の許に駆けつけて何とも云はずに美代の手紙を差出した。小左衛門はこれを見て大に驚き、直ぐ數馬方へ駆けつけたが、早や二人の婦人は、息を引取つて居た。その爲めに數馬も丹右衛門もその家の斷絶を免かれたのである。數馬は今更夢の醒めたやうな心持で、一念發起して、相應の養子を貰ひ受けて家督を譲り、自分は圓頂緇衣の身となつて美代の後を丁寧に吊らつたさうである。美代の手紙は一字一句皆な血涙の痕が見える。

「今度、妾の振舞を御覽になつて、亂心したやうに御思召すかも知れません。が、決して左様では御座いませぬ。近頃、申難いことですが、良人數馬殿、丹右衛門内儀と密通され、世間の噂にも上り居ります故、再三それとなく

御意見申し上げましたが、却つて嫉妬から出た言葉のやうに誤解なすつて、採用なさらぬので御座います。然しこの儀一般の取沙汰となれば、兩家共に断絶いたしますから、愁傷に存じます。それを止めるには、丹右衛門内儀と妾と自害するより他に致方が御座いませぬ。一應丹右衛門殿内儀へ御自害を御勧め申し御承知なき際は、御生命を頂戴した上、妾も自害いたします。この上は數馬殿の事、何分宜しく御願ひいたします。萬一數馬殿御心得違ひなされて、無益におはやまりなきやう御注意願ひます。そして心を改め給ひて忠義の道を勵まれんことを祈つて居ります」

〔棲處〕……土ある處必ず草あり、人の棲む處必ず戀あり……………(獨) 步)

〔一致〕……戀は容貌の美麗に關せず、趣味の一致にあり……………(獨) 步)

〔暖聲〕……戀の満足を味つた人は暖い聲を出だす……………(漱) 石)

〔凡夫〕……戀は執念深くして、凡夫は淺猿しきかな……………(芦) 花)

花)

1011 操 の 黒 髪

敦子刀自は文政八年の三月京都に生れ、温雅なる山河の間に育つたためか、幼少の頃から文學を好んで、夙に才媛の名を博したが、二十歳の時、鹿兒島藩士の税所篤之の後妻となつた。良人篤之は薩摩猛男の常として、時には無理な咎立てもし、手荒な振舞もあつたけれど、温良恭儉なる刀自は、更に言葉を返へしたことも、恨めしさうな素振を見せたこともなく、皆な自分の足らぬ勝ち届かぬ勝のためと思ひ做して、柔順に眞實に仕へたのである。また良人が交際のためとて、遊所の花蔭に夜を更して歸ることもあつたが、刀自はこれを全く

自分に飽かぬ節があるからであらうと、ますます身を謹むばかりで、少しも妬むことなく、良人が悪るかつたと自然に思ひ返へす日を待つのであつた。かくて数年の間は家庭圓滿、何時しか一男一女をさへ擧げたのであつたが、良人は假初の病の床に就いたのが原因で、刀自が晝夜の心を籠めての看護もその効なく、遂に不歸の客となつた。やがて野邊の送りをする時、刀自は亡夫の棺の中へ、自分の黒髪の末を削いて入れるとて

黒髪にうき身をかふるものならば

のちの世までもおくれざらまし

と詠んで、涙に袖を振つた。その時刀自は二十八歳である。處で刀自は、すでに良人に先立たれたからは、郷里に歸つて姑に仕へるのが、妻たるものゝ務めであると思つたが、京都の親族朋友は、かねて姑の性質を聞いて居るし加之に

刀自が蒲柳の生來の上に、長途の旅でもあり、また娘の徳子といふ足手まといがあるので、誰れ一人刀自の下向に賛成するものもなかつたので、刀自も聊か感ふたらしく、或る日その師友を仰いて居る太田垣蓮月の許に、相談の手紙を出して見た。すると、その返事に

『君の仰せとも覺えぬものかな。易きを捨て、難きに就くは、固より道を知るものゝ志にこそ。行くと留ると、今更思ひ煩ふべき事かは』

とあつたに、刀自はこゝに斷然意を決して、西下の途に就いた。かくて歸郷後刀自は晝夜姑を誠の母と敬ひ冊いで怠つたことなく、繼子を實子よりも愛で慈しんで、自分の衣裳、調度などはすべてこれをその二女に與へ、自分と徳子とは粗衣を纏ふて顧みず、斯くして偏へに氣取りの仕難い姑の心を、柔げること努めたのであつた。刀自がかく日夜の忠實な仕向けに、姑の邪慳の角も何時

しか折れて、後には刀自を杖とも柱とも頼んで、一にも刀自、二にも刀自、刀自でなければ、何事をも辨じさせないやうになつた。人々が姑のことを鬼婆と稱へるので、この事が何時しか姑に聞へた。すると、姑は

鬼婆なりと人や云ふらん

と詠んだ。刀自は直ぐ

佛にもまさる心を知らずして

と上句を附けてこれを和らげたといふことである。

- 〔眠氣〕……眠民を催す様な人間は何處か尊い處がある……………(漱石)
- 〔明日〕……人は明日を下するの明なし……………(芦花)
- 〔喫苦〕……苦中の苦を喫する人を人の上の人といふ……………(馬琴)
- 〔鍛練〕……暴風に逢はざれば船長の鍛練を知る能はず……………(西諺)
- 〔是非〕……我れ非にして勝たんより寧ろ是にして敗れざれ……………(ガーフィールド)

一〇四 明治の紫式部

薩摩の太守島津齊彬公は、刀自の貞操義行を傳へ聞かれて、深く心に慕つて居られたが、たま／＼若君が誕生になつたので、即日刀自を召してその子守役にせられた。刀自は朝な夕な真心を込めて、若君に仕へて居たが、花に障る嵐月に懸る雲の世の常に洩れず、若君は八つの歳に、假初の病に床に就かれて、日を経る儘に頼み少なくなつたので、刀自は我が養君の一大事と、身を忘れ命を捧げて看護をしたけれど、遂にその甲斐もなく、歸られぬ旅路に立たられた。悲嘆の間に中陰も過ぎたので、刀自は身の暇を賜つて、姑の傍に歸つて來たが、刀自は如何しても、若君のことが忘れ難いので、或る夜、机の上に香を炷き、若君の遺品を並べて、その前で自害を仕やうとした處を、姑が見つけて

懐劍持つ手に縋りながら

「敦子よ、物に狂ひしか、お前が居なくなつては、この老人の明日から誰れを便りに生き永らへやう、思ひ留つてくれよ」と泣く／＼止められたので、遂に思ひ止まり

おやといふ柵なくば涙川

ありて憂身をなげましものを

と詠んで、落る涙を袖で隠したのであつた。その後鳥津久光公の息女貞子姫が妙齡になられて、左大臣近衛忠房公に入興せらるゝ時附添として京都に上り、久しき年月を一日のやうに仕へたが、明治八年の三月、刀自が五十一歳の時、皇后宮の内侍に召され、權掌侍に任せられたが、爾來二十有餘年の間、皇后宮に奉侍して、花陰月下の詩興を優婉の辭に託したので、畏いあたりの寵遇は頗

る渥く、上藤 藤の敦子を敬慕しないものはなかつた。かくて刀自は明治三十年の二月、七十六歳で歿なつた。時に正五位を贈らる。刀自の生涯の詠歌の多数は、その家集「御垣の百草」に載つて居るが、試みに目に止まつた歌の一二を見れば

みな人にまたせまたせて咲かぬ間の

花のこゝろの長くもあるかな

あり立ちて笠や着せまじ夕立の

雨に打たるなでしこのはな

世の中をおもひ離れて眺むれば

さらにくまなきあきの夜の月

かじみとも見るべき人の多き世に

良心は賣らず

二九四

磨かみやみし我がこゝろかな
力なき老も重さを覺えぬは

霜夜にかづく衾なりけり

- 〔世離〕……人は素より世を離れて幸なる能はず……………(樗)
- 〔運命〕……人の運命は已に胎内にありて定まる……………(荇)
- 〔哲學〕……人動きて歴史出来、人考へて哲學生……………(獨)
- 〔驚愕〕……人生唯一の驚愕は恐らく死の外になけん……………(獨)
- 〔光輝〕……肉を鞭撻すれば靈の光輝増す……………(漱)

牛) 花) 步) 步) 石)

一〇五 良心は賣らず

英國の政治家兼詩人として有名なる士爵リチャード・ファンシヨールは、藝あり

徳あるアン・ハリソンといふ十九歳の美人と結婚して、二十二年の間は幸福なる生涯を送つたが、西班牙駐劄公使の時、一朝敢へなく病歿した。萬里異郷の空で頼りにする杖を失つたファンシヨール夫人は、身も世もあらず泣き崩れたが時の西班牙の女王は非常に同情を寄せ、若し天主教に改宗するなれば、年々六萬圓を給する上に、育児料をも與へんといはれたれど、夫人は如何やうに窮すればとて、黄金のために良心を賣る人非人ではないと、斷然と云ひ放つた。かくて終に澳大利の皇后アンの好意により、歸國することが出来たが、それから専ら女子教育に全力を注いで、清き生涯を送つたといふ。

- 〔自由〕……我に自由を與へよ、然らずんば死を與へよ……………(ヘンリー)
- 〔士節〕……財に臨まざれば義士の節を見ず……………(英 誌)
- 〔今日〕……今日を捕れよ、他日ありと信ずる勿れ……………(ホレート)

良心は賣らず

二九五

〔機會〕 機會は躊躇すれば多く之を失ふ………(サイイヲス)
〔克人〕 ……己れに克つは、即ち人に克つ所以なり………(漢)

一〇六 仁愛の徳

支那の元の天下を開いた英主世祖忽必烈の後、昭睿順聖皇后は、世に珍らしい英明なる賢婦人である。至元十三年世祖が宋を平らげて一大祝宴を張られ人々が大に喜んだが、獨り后は訝えない顔、帝は恠んで后に向ひ

「朕は今江南を平らげて、世は風波の跡を絶ち、人は皆な泰平を祝ふて居るのに、何んでお前は嬉れしうないのか」

と問はるゝに、后は恭しく手をつかへて

「古より千歳の國無しとか承つて居ります。私共の子孫には、かやうな

ことが無ければ幸ひだがなと考へまして、つい御座を白かせました」

と答へたのであつた。又た帝が宋の分捕品を山のやうに宮廷の庭に並べさせて后に一覽を求めらるゝと、后はザット一目見てズツと立ち去つた。帝は直ぐに使者を遣つて

「何かほしい物はないか」

と問はれると、后は

「宋の人が永年苦心して貯蓄致し、その子孫に遺しましたのに、その子孫は能くも守らないので、私共に分捕られましたもの、何うしてもこれを横取るに忍びませうや」

と答へた。尙ほ宋の太后全氏をも甚だ厚く待遇したといふことである。

主婦の好典型

二九八

- 〔人心〕……人として仁ならざれば人心亡ぶ……………(遊 民)
- 〔中央〕……善徳は兩端の中央の義なり……………(アリストートル)
- 〔安樂〕……慈仁は即ち是れ一切安樂の因縁なり……………(佛 典)
- 〔受益〕……滿口損を招き、謙は益を受く……………(書 經)
- 〔天國〕……清き生涯は此世からなる天國なり……………(ア ー ス)

107 主婦の好典型

二山伯養は江戸の儒者で、關西の中江藤樹と比べ稱へられた。その妻は北畠侯の臣垂井信則の娘で、十八歳の時に伯養に嫁いたが、嫁して後五日目に大學を聞いて、古學を慕ふの志が起り、夫の道はこれ我が道と程朱の學までも究めた。或る時隣家から火事が出た。折から風下の火を受けて眉を焦すまでに至つたが、夫の留守を預かつた妻は、我が袖を焼くとも勤めは勤めと、堅く守つ

て動かず、火が熄んでから難を遁がれたといふ。伯養は一たび中川侯に仕へたが、故あつて辭する時、義によつて事をなすに、後を顧みるの要は塵ほどもないと、良人を勵まし、喜んで牛込の裏店に住まひ、藥を賣つてその日の活計を立て、日々伯養と道を語り、聖賢の風を追ふた。かく學に親しむ間にも、舅姑に事へ、幼なきを慈しみ、家に病むものがあれば、自ら湯藥を嘗め、細大の事何に呉れとなく自らその衝に當つた。夫妻は壽長く、晩年その風を望んで來り集まるものが多かつた。

- 〔聖賢〕……伯夷叔齊は舊惡を念はず怨是を以て稀なり……………(孔 子)
- 〔獨尊〕……天上天下唯我獨尊……………(釋 迦)
- 〔閉口〕……賢き頭は閉ぢたる口を有す……………(英 譯)
- 〔安貧〕……貧にして安んずるものは富めるなり……………(シエキスピーア)

主婦の好典型

二九九

〔生傷〕……欲多ければ則ち生を傷く………(一省 心 録)

一〇八 尼の大氣焔

妙海尼は赤穂の義士四十七人の中でも、特に忠義の志し厚かつた堀部安兵衛武庸の妻であつて、彌兵衛金丸が一人娘お順である。上野介郎討入りの後ち、處刑か宥免か久しく決せなかつた義士の運命もいよく定まつて、老父彌兵衛金丸は細川邸で、未婚の夫安兵衛武庸は惜しや三十三の盛り年に久松邸で、見ん事切腹した後は、順は十九歳の花の顔せに黒を塗り、男姿に身を扮し、黒の法衣に杖一つ、いづこをあてと不知火の筑紫を初め、國々の靈場に巡禮し、専ら四十七士の冥福を祈つたが、行き／＼て長門は清末の宿屋へ着くと、病に罹つて生命が危ない。宿屋の主人はその素性を尋ねたのに、尼は頭を振り

「イヤ／＼御殿様か御側役でなくては」

と承知しない、已むなくかくと代官所へ訴へ出ると、城主から御側役二名に御典醫をそへて遣はされ、始めて赤穂淺野家の遺臣堀部彌兵衛金丸の娘なることが判り、城主も大にこれを優遇された。尼は或る時看護の役人に自分携帶の頭陀囊を取り來らせた。囊を開けばこはいかに、眼もあやなるばかり光り輝ける白金、役人は驚きその故を尋ぬるに、

「もはや廻國巡禮の志しも遂げぬれば、江戸表へ上りまして將軍様に御願ひの筋がござりまする。妾が若し此處で死にますれば、何卒この金をば江戸高輪の泉岳寺といふにお納め下され、故冷光院様の冥福のために御使ひ下さるやうに」

と、懇々と頼んだが、尼の命數未だ盡きずやありけん、程なく平癒し、厚く城

主に謝して立ち去つた。かくて江戸に上り幾回も淺野家再興の駕籠訴をしたけれど聞き入れられず、終に遠島の御沙汰にまで及ばうとする所を、有力者の救解で、僅かにその事なきを得たのであつた。時の老中松平左近將監正武朝臣田沼意次など飛ぶ鳥を落すバリ／＼の連中すら、妙海の人物を面白く思ひ、時々これを召したが、終に將軍家治公の耳に入り、謁見を仰せつけられたが、尼は斷乎として首を横に振つた。

「君侯の御家、今に再興の御許が出ないので、妾は絶望落膽、氣も張りもござりませぬ。將軍様に御目にかゝるも、無益なこと。『川がなければ簀もいらぬ』と世の諺にも申します。御謁見御無用々々」と辭して行かず。かくて九十一歳の高齡を保ちて、安永年中泉岳寺で歿くなつた。

- 〔淳化〕……天下忠を盡して淳化行はるゝなり……………(忠)
- 〔光榮〕……國の爲めに死するは光榮なり……………(ホー)
- 〔善事〕……善事ほど他人の喜ぶことは他にあるなし……………(シ)
- 〔能爲〕……汝の爲すことはよく之をなせ……………(ピツ)
- 〔教訓〕……好模範は最好の教訓なり……………(英)

一〇九 家庭の力

天平の五年從五位下遣唐判官となつた、平群廣成が難波津から船出する時、母の千里は驢に

たひ人のやどりせん野に霜ふらば

わが子はぐくめ天のむづむら

と一首の歌を詠んだ。昔からすぐれた人物の出る家庭には、必ず賢婦人が控えて居つた例にもれず、廣成の母も尋常の女でなかつたから、廣成がいざ出發といふ際には、この歌と共に

『汝忝けなくも、多くの官人の中から選ばれて、外國に名譽ある使命を佩びるからには、克く身を慎み行を正しくして、假りにも君國を辱しめるやうなことがあつてはならぬ』

と、懇々と訓誡した。廣成がまだうら若い身で、この大命を拜するやうになつたのは、全く母の力が實現したものといはなければならぬのである。

〔王臣〕……王臣蹇々なり躬の故にあらず

(孟)

子)

〔大徳〕……誠實は大徳を生ず

漢

誌)

〔足輕〕……精神愉快なれば足を輕からしむ

(伊

誌)

〔忍耐〕……忍耐は運命に勝つ

(カ

ム

〔失望〕……失望は痴人の斷案なり

(ヒ

ー

一一〇 八重の潮風

通女は京極氏の家臣井上儀左衛門本固の女で、萬治元年の六月讃岐の丸龜に生れた。幼い時から慧敏で書に巧みであつたが、父の教を受けて古書にも通じた。又た好んで烈女傳、女誡などの書を見て大に感ずる所があつた。十八の時京極家の御内方の御供で江戸に下つたが、折から風荒れて舟は漂蕩し、波の間に間に誘はれて、いづれへ流さるゝかを危まれた。通女はやがて

しるべせよ波間を分けてゆく舟の

心しられぬ八重のしほ風

と、一首の歌を詠んで、波枕旅路の樽を霽らすのであつたが、間もなく風止みて、荒にし波も忘れやうに静まる程に、空清く十六日の月は浪に照り榮え、泡沫の珠風に散りては玉兔の躍るさま、いとゞ通女の胸の琴線に揺りつ風吹けばみかけて白玉も

碎けて浪の立つにぞありける

と詠み。宿屋のいと賑はしく、立並んで家々の女共が旅人を呼び入れんととゞひる聲かしましく、小田の蚌の夕ぐれに鳴く心地すとて、

強呼旅路家々女。 粉面朱唇巧納交。

寓舍今宵何處好。 共言有酒有佳肴。

と、唐詩をも賦した、これは通女が東海紀行、歸家日記から抜いたものである。通女の名はその頃已にいひはやされ、今出川前内大臣、藤堂和泉守、酒井

雅樂頭などの諸侯に屢ばく召された。良人を三田茂左衛門宗壽といひ、家婦としても亦た批難する點がなかつたといふ。寛永七年良人の歿くなつてからは、一切を長子義勝に任せて剃髪した。その著書は家集(和歌)、括囊集(詩)、秋燈集(和文)。その他に家訓一卷、歸家日記、宗川子歌談などある。

- 〔詩人〕……詩人の理想は繪の中の人物となるにある……………(漱石)
- 〔無窮〕……美を求むるの心は無窮を追ふの心なり……………(樗牛)
- 〔藝術〕……人生短く、藝術は千古……………(花文)
- 〔藝文〕……藝は人生の研究の結果の報告……………(桐歩)
- 〔學者〕……學者は天下の利器なり……………(樗牛)

一一一 義の憤り

天保の頃、信州飯田の城主堀大和守の妾に豊浦といふのがあつた。容姿ばかりか、手跡も美事に、歌の道さへ暗らくはなかつたので、侯の寵愛は日を追ふて増し、公けの事すら、その一顰一笑によつて定つた。漸く内外に怨聲を聞くやうになつたので、家老安富主計は主家の一大事と侯に見え、言葉を盡して極諫したので、侯も辭むに辭まれず、離別の涙を振つて豊浦を黜けたれど、煩惱の犬は追へども去らず、忘れんとして忘れることが出来ぬ。秘かに豊浦と謀つて名を若山と改め、再び館に召して妾としたが、初めの程は若山も前とは打つて變つた謹慎に、益々侯の寵愛を一身に集めたが、やがて以前の我儘がむくむく頭を擡げ、遂に恐ろしくも夫人の地位を窺ひ、日に侯に薄りしかば、一族郎黨事理を知らぬ走卒も、若山が驕暴を憎んで切齒せぬものはなかつた。この時藤女は御世繼の御附役となつて居つたが、義の憤りはむらくと起り、抑へん

として抑へ難く、終に決心の臍を固めた、初め若山を師として敷島の道を學んだが、人非人を師と戴き手本を習ふのは、恥辱至極と、この時黄金を添えて法書十餘帖を返し、それとなく師弟の縁を切つた。かくなる上は師弟の義に背くこともあらじと、鶺鴒の目鷹の目、只管ら好き折を窺ふに、若山が驕慢は益々甚だしく、今にも主家の亂れを惹き起さんづ有様である。お藤はいよく意を堅ふし、もはや猶豫なりがたしと、一日白小袖の死装束を下に着込み、懐劍を呑んで若山の部屋を訪づれ、先づ罪の條々を一つくを擧げて大にこれを詰責した。若山は對ふるに辭なく、一度は心に愕さしが、憤怒を裝ふてお藤を叱りつけ、これを退かさうとしたに、お藤は素より覺悟の前なれば、少しも動かさず、若山は是非もなく、自ら起つて座を避けんとするのを、お藤は隙さず、延く長裾をぐつと踐まへ、襟髪取つて突据えた。若山は今は一生懸命、アレーと高く

呼んだので、お藤はこれまでと、懐劍の鞘を拂ひ

「あなたのやうな悪性を生け置いては、御家の大事。然しどうせ冥途へ追ひやるなら、せめて美しく死態だけは許さうと、最前から言葉を盡したのに、猶ほ卑怯未練な御振舞ひ、よし我が手で潔く成佛なさい。」

と、力の限り刺し通した。この物音と叫びに當直の士お藤が生みの父山口俊平は馳せつけ

「お藤ッ何事ぞつ。」

と抱きとめれば突き離し、重ねて若山の背に乗り、子腹に鋭き致命の一と太刀父俊平はお藤を捕へてこれに縛うち、あはれお藤は無念の涙を振ひながらも、力なく獄屋に下された。お藤は獄屋の中で

「妾奸婦の咽喉を突かずして縛へられたのは、返すくも無念の極みなれ、

たゞ一刀は脇腹深く刺したれば、よもや再び活きはすまじ。奸婦復た起たなければ、妾が本懐は遂げたれ、死すとも更に憾みなし」といつた、間もなく若山は悶え死をしたのである。

- 〔紫色〕……戀が怒ると九寸五分が紫色に閃る……………(漱)
- 〔自然〕……自然を忘るゝは即ち人間を忘るなり……………(櫻)
- 〔人心〕……人心は偏し易し……………(櫻)
- 〔人間〕……人間を支配するものは人間なり……………(獨)
- 〔教育〕……女は容貌より教育が必要だ……………(芹)

一一二 雪と諸共に

君侯も一生の愛人を殺した奴、殊に家臣と上の手前、首刎ねよとの嚴命に、

如何に涙なしとや譏らるゝ端なき獄卒なりとて、などか忠烈比ひ稀れなるも藤の首を打たるべき。首打つ役は誰れも承けがはず、やがてのことに籤引いてその役を定めた。かくて天保十一年師走の空寒き二日となれば、今日こそ烈女お藤が情知らざる侯の命にて首刎らるゝ日なればとて、刑場の周圍に集まるもの老幼となく、男女となく、いづれも不遇のお藤が刑せらるゝを悲しむのであつた。お藤はやがて定めの際に着くと、役人に向ひ

「妾は死を恐れませぬが、生憎いま月の事があります。死んだ後で見難い態を曝らすのは、いと本意なければ、これを淨むるの暇を賜はれ」

と乞ふた。かくて藤は穢れを淨めて座に戻り、髪の毛いたく纏れば、懐中から櫛取り出して後れ毛を梳り、衣襟を正して手を合せ

信濃なる山路の雪ともろともに

春も待たで消ゆる今日かな

と、一首の歌を詠んで、観念の眼を閉ぢた。役人が目隠しせよといふのを聞いて、

「妾も武士の娘、目隠しなどは恥かしう存じませぬ」

と云つた。かくて信濃の花は、芳紀正さに二十二歳を一期として、實に咲く春をも待たで散り失せた。噫々残念！ 御家の姻戚阿波侯の心盡しの結果として赦罪狀が到着したが、惜しや一刻遅かつた。亡骸は長源寺に葬られ、香花絶ゆる時なく、追善のさま恰かも王侯のと違はない。いつしか誰れとも知らず、その墓の側に碑を建て、事の顛末を彫りつけ辭世の歌さへ記した。侯は大に怒りて打ち碎かせたが、日も立たぬうち復たもや依然として、舊の通り建て居て、役人の手にも負へなかつたといふ。

- 【薄弱】……女性の品性に誠實を缺くは薄弱なるが故也……………(獨歩)
- 【泰山】……命は鴻毛よりも軽く義は泰山よりも重し……………(史記)
- 【節義】……節義は國家の元氣なり……………(文天祥)
- 【堅石】……石は破るべきも其堅を奪ふべからず……………(呂氏)
- 【并晩】……一事腕きに失すれば萬事皆腕きに失す……………(ケト)

一一三 他生の縁

桃山の夢夏の夕の霞と消えて、曠世の英傑豊太閤が遺業も、あはれ東の間の眺なりしか、關が原の一戦から大阪城の礎はいたくも緩びつ、いつまで保ち得べき、元老宿將は皆な生を愧ちでいさぎよくの覺悟は久しい。時は元和元年となつた。一度び結ぶと見えた和儀は、やがて滅亡の裏鏡とは人はいさ、智

慧袋の名を取りし木村重成の胸には、世態は歴然とうつて居る。果して夏の陣は起つた。だん／＼不利に陥る味方の大勢。重成が心は既に決したが、妻の眞野氏にはこれを最期とこそ明白に云はぬ。今生の名残を告げて、房々として縁なす黒髪に、一團の妙香蘭麝を焚き籠め、締むる甲の緒も堅く、あはれ決死の出陣をなさんとする時、妻女から一封の玉章が届いた。

「一樹の蔭、一河の流れ。また他生の縁とこそ承り候が、そも、おと／＼の比より偕老の枕を共にして、唯影の形に添ふが如くなれまゐらせ候。おん情こそは、うれしう候へ。この頃承り候へば、主家の爲め最早や最期の御一戦の御覺悟の由、かげながら嬉しく思ひまゐらせ候。唐の項王とやらんの虞氏、木曾義仲殿の松殿の局、さるためしは、わが身も厭はしう候。されば世に望み窮りたる妾が身にては、せめて御身御存生の中に最後を致し、死出

の道とやらんにて待ち上げ奉り候、必ずく秀頼公多年海山の鴻恩御忠却々
さま頼み上げまゐらせ候。あらくめでたくかして

妻より

長門守重成様

と。命はこの一書に籠つて、亡骸は美しく床に横たはつて居た。時に年十八。

- 〔大小〕……最大事は最小事の助を假りて成る………(英 彦)
- 〔吾往〕……自反して縮からは千萬人と雖も吾れ往かん………(孟 子)
- 〔肉塊〕……人は悉く主義の肉塊に過ぎず………(獨 歩)
- 〔卑怯〕……負けるが恐さの中立は卑怯の骨頂だ………(芦 花)
- 〔同者〕……同じきものよみ同じき者を解す………(櫻 牛)

美しき女ごころ 終

大正九年三月二十日印刷
大正九年三月廿五日發行

精神修養 美しい女ごころ

定価金壹圓五拾錢也



著者 平野小潛
 發行者 石島正壽
 印刷者 山村龜藏
 印刷所 山村印刷所
 東京市神田區西小川町二丁目三番地
 東京市麻布區北新門前町十八番地
 東京市麻布區北新門前町十八番地

發行所 東京市神田區西小川町二丁目三番地 電話町四一八七 振替東京二一七五三番 清泉堂書房

387
120

終